

特40

594

今昔物語

卷第29

今昔物語集卷第二十九

本朝付惡行

西市藏入盜人語第一

多衰丸調伏丸二人盜人語第二

不被知人女盜人語第三

隱世人贊成□□語第四

平貞盛朝臣於法師射取盜人語第五

放免共爲強盜人人家被捕語第六

藤大夫□□家人強盜被捕語第七

下野守爲元家人強盜取女語第八

阿彌陀聖人殺人宿其家被殺語第九

伯耆國府藏入盜人被殺語第十

幼兒盜瓜蒙父不孝語第十一

筑後前司源忠理家入盜人語第十二

民部大夫則助家來盜人告殺害人語第十三

九條堀河住女殺夫哭語第十四

檢非違使盜系被見顯語第十五

或所女房以盜為業被見顯語第十六

攝津國來小屋寺盜鐘語第十七

羅城門登上層見死人盜人語第十八

袴垂於關山虛死殺人語第十九

明法博士善澄被殺強盜語第二十

紀伊國清澄值盜人語第廿一

詣鳥部寺女值盜人語第廿二

具妻行丹波國男於大江山被縛語第廿三

近江國主女將行美濃國賣男語第廿四

丹波守平貞盛取兒干語第廿五

日向守□□殺書生語第廿六

主殿頭源章家造罪語第廿七

住清水南邊乞食以女謀入人殺語第廿八

女被捕乞食弃子逃語第廿九

上總守維時郎等打雙六被突殺語第三十

鎮西人渡新羅值虎語第卅一

陸奥國狗山狗昨殺大蛇語第卅二

肥後國鷲昨殺蛇語第卅三

民部卿忠文鷹知本主語卅四

鎮西猿打殺鷲爲報恩與女語第卅五

於鈴鹿山蜂螫殺盜人語第卅六

蜂擬報蜘蛛怨語第卅七

母牛突殺狼語第卅八

蛇見女陰發欲出穴當刀死語第卅九

蛇見僧晝寢閉吞受婦死語第四十

西市藏入盜人語第一

今昔□□天皇の御代、西の市の藏に盜人入にけり、盜人藏の内に籠たる由を聞て、檢非違使共皆打衛て捕むと爲るに、上の判官□の□□と云ける人冠にて青色の表の衣を着て、調度負て其中に有けるに、鉾を取たる、放免の藏の戸の許に近く立たるを、藏の戸の迫より盜人此の放免を招き寄す、放免寄て聞くに、盜人の云く、上の判官に申せ、御馬より下て此の戸の許に立寄せ給へ、御耳に差扉て忍ひて可申き事侍りと、放免上の判官の許に差寄て盜人此を申すを告れば、上の判官此れを聞て、戸の許に寄らむと爲るを、異檢非違使共此れ糸便なき事也と云て止む、然れども上の判官此れは、機有る事ならむと思て、馬より下て、藏の許に寄ぬ、其の時に盜人の戸開て、上の判官を此無に入らせ給へと云へば、上の判官

戸の内に入ぬ盗人戸を内差に差籠無*みて檢非違使共此れを見て糸奇異
き事也藏の内に盗人と籠つ衛て捕へむと爲る以上の判官盗人に被呼
て藏の内に入て内差に差籠りて盗人と語ひ給ふ此れ世に无き事也と
云て誘誘り腹立合たる事无限一而る間暫許有て藏の戸開ぬ上の判官藏
より出て馬に乗て檢非違使共の有る所に打寄て此は様有る事也けり
暫く此の追捕不可被行を可奏き事有と云て内へ參ぬ其の間檢非違使
共は打廻て立る程に暫許有て上の判官返り來て此の追捕不可被行す
速に罷り返れと宣旨有と云けれの檢非違使共此れを聞て引て去にけ
り上の判官一人は留りて日の暮れて藏の戸の許に寄て天皇の仰せ給
ける事と盗人に語けり其の時に盗人音を放て哭く事无限一其の後上
の判官の内に返り參にけり盗人は藏より出て行けむ方を不知す此れ

誰人と知る事无し夕遂に其の故を人不知さりけりとなむ語り傳へた
ことや

多衰丸調伏丸二人盗人語第二

今昔世に二人の盗人有けり多衰丸調伏丸と云ける多衰丸は顯れて
人に被知たる盗人にて有けるに常は藏穿つ事をそ役としける度々被
捕て獄に被禁けり調伏丸は何也ける事に有らむ誰とも不被知ぬ盗
人にてなむ有ける多衰丸も似たり其の時になむ多衰丸怪ひ思ひける
調伏丸名を聞けとも遂に誰と云ふ事をも不被知て止にけり世にも
人皆極く怪ひけり此れを思ふに調伏丸極て賢き奴也の多衰丸と具
して盗盗し行けむに誰とも不被知て止にけり極て難有き事也とそ世の
人云けるとなむ語り傳へたこと也

不被知人女盗人語第三

今昔何れの程のことより有けむ侍程也ける者の誰とは不知す年卅計
にて長ぬはや四にて少し赤鬚なる有ける夕暮方よりト□の邊を過ける
を半節の有けるより鼠鳴をして手を指出て招けれの男寄て召にや候
らむと云けれの女音よて聞ゆへきことの有てなむ其の戸は閉たる様
なれども押せば開也其れを押開て御せと云けれは男思ひ不懸ぬこと
のなむの思ひなから押開て入よけり其の女出會て其の戸差て御せと
云けれは戸を差て寄せたるに女上て來と云けれは男上にけり簾の内
に呼入れたれは糸吉く□たる所に清氣なる女の形ち愛敬付たる四年
廿餘計なる只獨り居て打咲て^被けれは男近く寄よけり此許女の睦ひむ
に男と成なむ者の可過ぎ様あけれは二人臥にけり其の家に火一

人なけれは此は何なる所に有らむと恠く思へとも氣近く成て後男^無
女に志深く成にけれは暮るも不知て臥たるに日暮ぬれば門を叩く者
有り人无けれは男行て門を開たれば侍められたる男二人女房めきたる
女一人下衆女を具して入來たり部下に火など燃して糸清氣なる食物
銀の器共よ爲居えて女にも男にも食せたり男此を思ひける様我入て
戸は差てき其後女人に云ことも无かりつるに何にして我り食物をさ
へ持來たるよ有らん若異夫の有にや有らむと思ひけれとも物の欲
く成にけれは吉く食つ女も男も不憚す物食ふ様月无りらす食畢は
れは女房めきたる者取拵めなどして出て去ぬ其の後男を遣て戸を
差せて二人臥ぬ夜明て後火門を叩けれは男行て開たるに夜前の者共
には非て異者共入來て薪打上け此彼こ打掃などして暫居たる程に粥

強飯持來て其等食なやして取次き晝の食物持來て其等に食せ畢て夕
皆去ぬ此様よいつの二三日有る間女男に物などへ可行き所や有ると
間へは男白地よ知たる人の許に行て可云事を待れと答ふれば女然
らと疾く御せと云て暫居たる程よ吉き馬に尋常の鞍置て水旱裝束た
る雜色三人許舍人と具して將來り然て其の居たる後に壺屋立たる所
の有けるより着て欲き程に裝束を取出して着せければ男其れを打着
て其の馬に這乗て從者共を具して行けるに其の男共心に叶ひ仕ひ吉
況こと无限ら然て返にければ馬も從者共も女何にも不云ねとも返り
去ぬ物食する事なども女の云ひ俸つることを无けれども何こより持來
るとも无くて只同一様にをしける此様に爲る程に乏き事无くて廿日
計有て女男に云ふ様思ひ不掛す徒なる宿世の様なれとも可然くてこ

その此ても御すらめ然れば生とも死とも我の云はむ事はよも不辭し
など男實に今は生むとも殺さむとも只御心也と云ければ女系喜く思
たりけりと云て物食ひ拈めなとして晝は常の事なれば人も无くて有
ける程に男を去來と云て奥に別也ける屋に將行て此の男髪に繩を付
て幡物と云ふ物に寄せて背を出させて足を結曲めて拈置て女は烏帽
子を一水旱袴を着て引編て答を以て男の背と慥に八十度打てけり然
て何の思ぬると男に問ければ男氣しくは非すと答へければ女然れの
よと云ひて竈の土を立て吞せ吉き酢を吞せて土を吉く掃て臥せて一
時計有引起して例の如くに成にければ其の後は例よりの食物を吉く
して持來あり吉々く勞はりて三日計を隔て杖目をろ愈る程に前の所
よ將行て亦同一様に幡物に寄せて本の杖目打ければ杖目に隨て血走

り肉亂けるを八十度打てけり然て堪ぬへーやと問けれハ男聊氣色も不替て堪ぬへーと答へければ此の度は初よりも讚め感して吉く勞て久四五日計有て久同様に打けるに其れにも尙同様に堪ぬへーと云ければ引返して腹を打てけり其れにも尙ことにも非すと云ければ艶す讚め感して日來吉く勞て杖目既に愈畢て後夕暮方に黒さ水旱袴と清氣なる弓胡録脛巾藁沓などを取出して着せ拈めつ然て教ける様此より夢中の御門へ行て忍やハに弦打をせよ然らば人久弦打をせむ物を久□を吹ハ久吹ハむ者有らむすらん其よ歩ひ寄らせ此ハ誰をと問らんすらむ然らば只侍りと答へよ然て將行ハむ所に行て云ハむに隨て立てむ所に立て人などの出來て妨けむ所を吉く防け然て其れより船岳の許に行てを物は沙汰せむとすらん其れよ取らせむ物を努々不取

そと吉く教へ立て遣つ男教へけるまハに行たりければ云ける様に呼ひ寄せてけり見ければ只同様なる者廿人許立たり其れに差去て色白らハなる男の小さやハなる立たり其れハ皆畏まりたる氣色にてそ有ける其の外に下衆の二三十人計有ける其にて云ハ沙汰して播烈て京の内に入て大き也ける家に入らせとて廿人計人を此彼この煩はと思はける人の家々の門に二三人つゝ立て殘ハ皆其の家に入ぬ此の男をは試むと思ければ中に煩ハしき家の門に人を立たりけるに加へてけり其より人出來むとして防て射けれとも吉く戰て射取などして方々也ける者其の翔をも皆吉く見てけり然て物取畢て船岳の許に行て物共分ちけるよ此の男に取せけれハ男我れは物の要も不待す只此様よ習はむとて參つる也と云て不取さりければ首と思はく

去て立てりける者請思たりけり然て皆各別れ去にけり此の男は此の家
家に返り來たりけれ湯涌し儲け食物など儲けて待けれの然様のこと
など皆畢て二人臥す此の女の難去く哀れに思はければ男此れを疎と
み思ふ心も無_四をける此の様_レ爲ること既に七八度に成にけり或る
時の打物を持せて内にも入けり或る時の弓箭を持て外にも立て
けり其れに皆賢く翔けれの如此くして有る程に女鎰を一ツ取出て男
に教へて云く此れの六角よりは北□□よりと□□に然々云はむ所に
持行て其に藏何つ有らむ其の藏の其方なるを開て目に付らむ物と吉
く拈め結はせて其の邊に車借と云ふ者數有を其れを呼せて積て持
來とて遣たりけれの男教たるまゝに行て見けるに實に藏共有る中に
教へつる藏を開て見れの欲き物皆此の藏に有り奇異き態_四なと思て

云けるまゝに車に積て持來て思しき様に取り仕ひけり此様にしつゝ
過しける程に一二年にも過ぬ而間此の妻有る時に物心細氣_一思て常
に哭く男例に此ることも无きに怪しと思て何と此は御すると問け
れば女只不意す別れぬる事も有らむすらむと思ふ_四哀なると云
ければ男何なれば今更に然に思すと問ければ女墓无き世の中は然
のみこそ有れと云ければ男只云ふことなめりと思て白地_一物に行
むと云ければ前々爲る様に爲立て遣てけり共の者共乗たる馬なども
例の様_レこそ有ぬらんと思ふに二三日不返ま_一き所にて有ければ
共の者共ども馬乗ども其の夜の留めて有けるに次の日夕暮れに白地
の様_レ持成して引出しけるまゝにやうて不見ゆさりければ男明日返
らむするよは此は何あることと思て尋ね求めければもや_四て不見

悉て止にければ驚死恠ひ思て人に馬を借て忿き返て見ければ其の家
跡形も无かりければ此は何れと奇異く思はて藏の有る所を行て見れ
とも其れも跡形も无くて可問き人も无かりければ云甲斐无くて其の
時よそ女の云ふこと思ひ被合ける然て男可爲死方无く思はければ本
知たりける人の許に行て過しける程に爲付よけることなれば我が心
と盗しける程よ二三度にも成にけり而る間男被捕にければ被問ける
よ男有のまゝに此のことを不落す云けり此れ系奇異き事也其の女の
變化の者なにて有けるよや一二日四程に屋をも藏共をも跡形も无
く壞失ひけり希有のこと也又若干の財從者共をも引具して去てむに
其の後不聞すして止にけむ奇異きこと也りゝ家よ居乍ら云ひ俸る
ことも无きよ思ふ様にして時不違す來つゝ從者共の翔ひけむ極て

恠きこと也彼の家に男二三年副て有けるに然也けりと心得ること无
くて止よけり又盜しける間も來り會ふ者共誰と云ことをも努不知て
止にけり其れに只一度を行會たりける所に差去て立てる者の異者共
の打畏たりけると火の焰影に見ければ男の色とも无く極く白く嚴々
りける四頬つき面様我り妻よ似たる如など見けるのみを然にや有ら
むと思はける其れも慥に不知ねは不審くて止にけり此れ世の希有の
事なれば此く語り傳へたるとや

隱世人智成□□語第四

今昔□の□と云ふ人有けり父母にも送れて世と何如よせむと思ひ續
て妻も无かりければ便有らむ妻をも如など尋ける程よ祖も无くて身
一つ便々しくて過り女なむ有ると人の告ければ尋て假借しける程に

女こと請してけれの男女乃家に行て會にけり男女の家の有様を見るに可有りしく吉く造たる家に住付て糸織し氣也女房長しき若き取加へて七八人許有り皆な着物あと目安くて着たり半物なをも若や如に勇み寵かなる數有り然何くより物は持來るとも不見ゆねをも我如將來小舎人童などの着物なと糸吉くて有せけり牛車なとも思ふ様にて不之四らて有せければ佛神の助なめりと喜ひ思けるに妻の年廿餘計にて形ち美麗に髪長かりければ此彼のこの宮仕人を見るにも此許の者は不見えして者をと旁に喜く思て夜枯もせず棲む程に四月五月に成る程に妻も懷妊して惱む氣色にて三月計に成ぬるに晝る前に長じき者二人副居て腹打搜などして有るに我れも産まむ程危くや有らむすらむなど兼て怖く思ひ次けて臥たる程に此の前に居たまつる女房一

人つゝ立て人も無く成ぬ男我如此て臥たるを心知らひて立ぬるなめりと思ひ成ちて臥たる程に北面より人遠く來て障紙の有ると立てつ而る間思ひ不懸ぬ方なる障紙を引開れ誰か此は開くるに如有らむと思も不敢て見遣たるに紅の衣に蘇芳染の水旱の重ねたる袖口を差出たれに此は何かに誰か來ると思ひ□□て有るに差臨たる顔を見れに髪どの後様に結て烏帽子もせぬ者の落躰と云ふ舞の様にて有れば奇異く怖しく思ひて此は晝盜人の入にたるよこそ有けれど思て枕上なる太刀を取まゝに彼れに何者を人や有ると高や如よ云へに妻の引被て汗水に成て臥たり此く云を聞て此の落躰に似たる者急と近く寄來て云く穴鎌させ給へ己は君の怖くと思し可食き身にも不候す骸骸を御覽して恐させ給ふに理に候へとも慥に聞せ給ひな哀れと思し

食す様も候ひなむ然れに聞し食て後に恐も畢させ給へと云次て涙を流してさめくくと哭く時に此の妻も哭く氣色なれに男此れを旁に心不得す思て直く居成て心を静めて後に此は何なることを何なる者の入來て此の云そと云て心に思ひく盜人の物取に入たるか爰は殺しに來る者かと思ひつるに其氣色は無くてさめくくと哭くを恠しと思ふに此の者の云く申し候し付て慎しく堪難く思給つれとも然りとて被知れ不奉て可候きことにも不候ねなど此の相ひ具せさせ給ひたる人は已の只一人持て候ふ娘也母も不候ねと極て糸惜と思給へとて此て置て候ひつるを暫しは御し遂て心事難有しと思給へて知せ不奉さりつるに此く此の人の不只す成て御志も不愚ぬ様に承はり候へは遂し知し食さむ物故に不隠れ申し不候しと思ひ給て此く參て候ふ也今は

此く見え奉ぬれば心安く候ふ此る者の娘也けりとして思し食し疎みて若し去らせ給ひぬるならば世の中より生廻て御まさせぬる者とな思し不食を必ず恨み奉りなむとす其れに若し此く申すに付て御志不替すして御まさは御身一つは樂くて御ましなむ但し此る者の娘を云ふことも更によも人知り不候し己は今日より後爰參り不候まゝ然此れは者の奉る者なれば主などや有なんと思し食て疑ひ慎ませ不給まし思しきに隨て取り仕はせ給へとて藏の鎰を五つ六つ取出して前に置たり爰近江國に知たる所の券に候ふとて結束ねたる文共三結置たり今よりは見え不奉候まし若し去せ給ひなむ時にを必ず見え奉り候はむとす不然さらむ限は影の如く副ひ奉て候はむと云て立て去ぬ男此を聞て口て何ゆに可爲きことにか有らむと思ひ廻り氣色を妻見

てさめく〜と哭けは男云ひ誘へて心の内は思はく萬乃こと命に増こ
と无し若し去なは必ず被殺なむとす人にも不被知ぬ者の思ひ掛て副
なむには四よはむことは有し然れは命も惜しく夕妻も去をかたく思
ければ忘かるへきにこそは有らめと思ふにも亦出む所に人乃忍ひて
物云はむも只此のことを聞て云ふなめりこそは思ひむすらめ此は
極き態のなと思て旁々思ひ煩へとも命惜けれの只此を不立しと思ひ
固めてけり然て其の得させたる藏の鑑を以て云けるまゝ其藏を開
て見けれの萬の財棟と等しく積てなむ有ける思ひきに隨てそ取り仕
ひける夕近江に知ける所をも偏に我の領にしてそ樂くて過ける程に
生夕暮に糸清氣なる紙に申文の様なる物を入持來て差置て去ぬるを
何文ならむと思て取て披て見れば假名交りに此く書たり恠き様を見

の奉て後思し食し不疎まをて藏の物をも召し仕はせ給ひ近江の所
をも不憚す領せさせ給ふ喜ひ申すも愚に候ふ死候なり御護こそ罷り
不成き己れの近江の國に然々と申し候ひし者に候ふ其れは不思さる
外に人よ被謀て憑しき氣色見えむとて被雇て罷り候ひしに盗人仕け
るをも不知給へす只敵討そと思て罷て候ひし程に被捕て候ひしか構
て逃て命許を存して候へとも然る耻を見候ひしは然か有し者そ
とも人に被知れ不候て早う死さど人には聞せて此く隠れて候ふ也其
此に世に候ひし時よ豊に候ひしは京よ此く家をも造り置て藏共に
財をも貯へ置て候ひしかは此の人をも此に居えて候ひつるに此様に
御まさむ人に奉らむとて于今持て候ひつる也近江の所も己の先祖の
領し候へは可妨き人の不候す其れに此く思ひの如く御ませの忝くな

むと細々と書たるを見てそ然の然の有ける者とも知ける其の後ハ藏の物をも取り仕ひ近江の所をも知て樂しくてそ有ける然るにても少し棲惚死妻也の後は人知しけるよ有らむ此なむ語り傳へたる
と云

平貞盛朝臣於法師家射取盜人語第五

今昔下京邊に生徳有る法師有けり家豊よして萬つ樂しくて過ける程に其家の恠をしたりけれハ賀茂の忠行と云ふ陰陽師に其の恠の吉凶を問ひに遣たせけるに某月某日物忌を固くせよ盜人ことよ依て命を亡さむ物をと占なひたりけれハ法師大きに恠しみ思ひける程に其日に成しけれは門を閉て人も不通はせずして極く物忌固くして有ける程に此の物忌度々よ成て其の物忌の日の夕暮方に門を叩く者有る怖

れて答もせて有けるを責めて叩けれは人を以て此れハ誰か御をるそ固き物忌をと云せたりけれは平の貞盛の只今陸奥の國より上たる也と云ふ其の貞盛は此の僧と本より極き得意にて極く親く語ひたりける間也けれは貞盛の云ひ入さする様只今陸奥の國より上り着たるに夜には成にたり今夜は家への故よ行き不着しと思ふに何こへの行のむ然ても何なる物忌をと問内より云ひ出さする様盜人事に依て命を可亡にと占ひたれば固く忌む也と貞盛云ひ入さする様然てハ態とも貞盛を呼び籠めて有せめ何てハ貞盛をは可返さそ然れハ法師現よと云思ひけむ然ハ殿計入り給へ郎等御從共を返し遣てよ尙物忌固く侍りと云ひ出したりけれは貞盛然也と云て我許入て馬共も郎等共も皆返し遣つ法師をは物忌固く坐すなれば何よハ出給ふ己は此の放出

の方に今夜計侍む今日家へ不罷ましき日にて有ればなむ然て朝對面
し申さむとて放出の方に居て食て寝ぬ然て夜半には過やしたらむと
思ふ程に門を押す音のしけれの貞盛此は盗人にや有らむと思て調度
掻負て車宿の方に行て立隠れぬ盗人にて有ければ太刀を以て門を開
てはらくと入て南面の方に立廻る程に貞盛盗人の中に立交りて物
共置たる方への不遣はして物も无き方と此はなむ物は有なる只此を
踏開て入れと行ひければ盗人貞盛か云ふとも更に不知て有るよ今火
吹く程に貞盛か思はく盗人入り立なは不意に法師もを被殺る然れば
入り不立ぬ前に射てむと思へとも調度負て□氣なる盗人の奴の喬に
立てれば危く思ひけれども然りとて可有きことを思はと思て其奴を後
の方より征箭を以て後より前に射出しつ然て後に貞盛後より射にこ

そ有けれと云て此の被射たる奴を逃よと云て射伏せたる奴を奥様へ
引入れつゝ忽異奴の射にこそ有けれ氣くくの不有し只入れと瘥や
に行ふ奴を忽貞盛喬より走り寄て最中を差宛て射つ然て亦貞盛射に
こそ有けれ今は逃げよ已等と云て其れをも奥様に引入れつれば二人
乍ら奥の方に倒れ臥ぬ又其の後貞盛奥の方より鳴箭を以て射次け
れば殘の盗人共は門櫓へ追ひしらひて出るじや背を押重ねてふた
くと射持行くよ箭に付て門の前に三人は射伏せつ本十人計有ける
盗人なれば其の殘の奴原の傍への有らむ様も不知に走て逃て去にけ
り然れば四人は箭庭に射殺したりけり今一人の四五町計逃去を腰と
被射にけれの否不逃て溝の有けるになむ倒れ入て有ける夜明て後に
其奴を問て其よりなむ傍への奴原を捕へたりける然れば賢き貞盛

の朝臣の來り會て命を存したる法師になむ有ける餘り固く忌て不入
さらましかは法師は必ず被殺なましとを語り傳へたるとや

放免共爲強盜入人家被捕語第六

今昔□の□と云ふ者有けり家は上になむ住ける若かりける時より受
領に付て國々より行くと役として有ければ便漸く出來て萬つ叶ひて家
も豊に從者も多く知る所おとも儲てを有ける而る間東の獄の邊近き
所以て有ければ獄の邊に住む放免共數相ひ議して強盜よて□の家
に入らむと思けるよ其家の有様を委も不知さりければ構へて其の家に
有らむ者を一人語ひ取らむと謀けるに□り攝津の國より知る所の有け
るより宿直に上たりける下衆男の有けるを放免共其奴はしも田舎人
なれば被□□□なむ物を入に得ていよも不聞ぬ様は不有しと議

して構へて其の宿直人の男を放免の家に謀寄せて物吉して食はせ酒
など吞せて語ひける様和主は田舎人にて有なれば京にては常に物欲
き時も有らむ夕要事なる事も有らむ極て糸惜き故有て和主を糸惜と
思ふことの有るを和主は若ければ否不知然れば今よりは京に有ら
む程は此様に常に座せ物も食せむ夕用有らむ事は云へなど勲に語ひ
ければ男喜とは思ひ乍ら恠と思ければも然る様こそは有けめと思
て返ぬ此様に爲ること既に四五度も成にければ放免共今は□得つ
と思て辭ひ氣無く語ひ付て後云ける様實に和主の宿直する家に我
等入統てむや然らむ無限き喜びを云はん此の世に身一つ過計のこと
をこそはせめ此れ人の可知きことに非ず世に有る人は上も下も身の
爲よこそ人も怖しけれなどこそ吉く□ければ此の男下衆なれとも思

量有て賢かりける奴にて心の内よの奇異きことなれぬ思ひ不懸まじきことよは思けれども只今辭ひの定めて悪かりなむと思て糸安死こと也と請てけり放免共喜て旦とて絹布など取せけれども男只今不念ともと爲得てむ後にと云て不取て返るに放免の云く然らば明日の夜となむ思ふを夜半計よ其の門の許よ至て門を押しは儲て門を開よと男ことにも非すと云て返ぬ放免共は彼の所兵の家は非ねは心安く思て其の心得たる者共十人計同心にて明日の夜來り可會き由を契て散ぬ此の男の家の家に返て何りて此のことを密に主に聞せむと思て伺ける程よ主えんの邊に出たりければ男土よ突居て前に人も无き程に物云はむと思たる氣色なれば主和男は何事云はむと思ふを暇得て本國よ下らむと思ふりと問ければ男然に不候す忍て可申き事の候ふ

也と云ければ主何事ならむと怪ひ思て隠れの方に呼び放て聞けば男申すに付て極く皮□く候ふ事なれとも聞せ奉らては何めてかと思ひ給へてなむ然□の事の候ふ也と云へは主極く喜く告たる下衆は物の欲きまゝに此る心は無き者を哀れ也けりと云て然らむ和男只門を開て盗人を入れよと計云て心に思はく外にて追ひ返しては否不捕すして誰とも不知て止なむ悪かりなむと思て手迷ひをして親く年來知りける□の□を云ふ兵の許よ行て□の密に此の事を云ければ□聞き驚て深き契有ける人にて□郎等とも无く雜色をも无く兵の道に達しける者共五十人許を明日れ夕よ竊に遣らむと云ければ□喜て返にけり夕の夜に成て彼兵者弓箭兵杖共とは或は物の裏み或は長櫃に入れなとして然り氣无き様よて前に遣て夜に成て兵共は只の様にて一人

つゝ其の家に行て隠れて居たりける漸く其の時に成て或は調度を
負ひ或は打物を取て皆甲冑を着て手を舐て待けり夕出ても逃る事有
はとて少々は外の辻々にも立てたりけり放免共は努々此の事を不知
すして只偏に仲人の男を憑て夜打深更る程に其の家に行て門を押し
は男支度したる事あれば行て門を開るまゝ走り返て板敷の下に深
く這入ぬ其の時に放免共はらくと入るに立て兵共儲たる事なれば
正は愚ならむやは獨り宛に捕へつ盗人は十人許有ける一艶ぬ兵共の
四五十人兼て儲て待たむは聊に不動さすして皆捕へて車宿の柱に
縛り付て其の夜は有て夜明て後に見れば皆目をしは叩て被縛付て有
り此る奴原獄に禁たりとも後に出なは定めて悪き心有なむと思け
れと然り氣无くて人にも不知せすして夜に入て竊に外に將行て皆射

殺させてけり然れば強盜に其の家に行て被打殺たる様にてなむ止
にける由无き物欲くして命を亡す奴原りな□は賢き男の徳に命を
存したりけるとなむ語り傳へたるとや

藤大夫□□家入強盜被捕語第七

今昔猪熊と綾の小路とに藤大夫□□と云ふ者住けり受領の共にや有
けむ田舎に行て返り上たりけるに物共多く持來て繚けるを隣に有け
る盗心有ける者見て此様の態にける得意共を數語ひ集めて強盜にて
其の家に入しけり家の内には有ける人皆或は物の迫に隠れ或は板敷の
下には這入ぬ待受て戦ふ一人も无ければ盗人共糸靜に家の内の萬の
物を掠て露殘す物元く皆取て去ぬ而る間板敷の下に逃入たる小男の
低臥せる有けり盗人の物取畢て返る時に其の盗人を此く板敷の下に

隠れ居る小男の盗人の板敷より走り下る足を撥抱て引ければ盗人低
しに倒にけり其の上此の小男壓懸て盗人の□を刀を抜て二刀三刀
突ければ盗人足を被取て痛く倒れにければ胸を突て物も不思ひさり
けるに此く□を數度被突にければ此も彼も不爲てやめて死にけり其
の時に此の小男盗人の二の足の頸を取板敷の下に奥様に深く引入れ
つ然て此の小男は然り氣无様にて出來たれば逃隠れたりつる者共
盗人去ぬれば皆出來て惶り合たり衣被剝たる者は裸にて篩ふ家の内
の萬の物共被踏壞れ被打損たる事无限し盗人は物を取畢て猪熊下
し出て走けるに隣の者共の起合て箭を射懸ければ散々に逃て去にけ
り其れし此の一人の被突殺たるをも否不知す夜半過て入たる盗人な
れば其の後幾も无くて夜明ぬ隣人も集り來て訪ひ惶る西の洞院と□

とに有る藤判官□と云ふ檢非違使も此の藤大夫と得意にて有ければ
人を遣せて訪ひけるよし此の盗人突殺したる小男彼の藤判官の許に行
て然々のことなむ仕たると聞せければ藤判官聞き驚て放免を呼て彼
の藤大夫の家遣て見せければ放免其の家に入て被突殺たる盗人を
引出して見れば隣に有る某殿の雑色也けり早う隣にて物共を持來た
りけるを見て入たる也けり放免此の由を藤判官に申せば藤判官即ち
彼の雑色の家し人を遣て妻を擲させつ妻は定めて知たらんとて問け
れば妻否不隠きて夜前こそ其丸彼丸は詣來て私語仕りし其等か家
共は其々也と云ければ且つ檢非違使の別當に申して其の女を前に立
て其の家々に行て捕ふれば其奴原今夜盗人し極して臥せりけるを皆
員を盡して尋ね捕てけり可遁き事にもあらぬは片端より皆獄し被禁

にけり又其の盗み取たる物共も員に依て取出てけり然て此の盗人突
殺したる小男は其より後極き兵に被用てなむ有ける然れば人の家に
は物共取り披て由无からむ人などには不見まじ也此る心發す者の
有る也從者とても可免き者も非ず況や疎からむ者の然る心有らむは
必ず可疑き事也とあむ語り傳へたることや

下野守爲元家入強盜語第八

今昔下野守藤原の爲元と云ふ人有けり家は三條よりは南西の洞院よ
りは西になむ住ける十二月の晦比に其家に強盗入にけり隣の人驚き
合て惶ければ墓々しく物も否取り不得て盗人被籠ぬと思はければ其
の家に吉き女房の御けるを質に取り抱て出にけり三條より西様にて
行きけるを此の質をは馬に打乗せて大官の辻に出たるに人追て來に

けりと思えければ此の女房の御衣を引剥て盗人は弃て逃にけり女房
習ひ不給ぬ心地裸にて怖々しと思ひける程に大官河に落人まけり
水も凍して風冷きこと无限し水より這上て人比家に立寄て門を叩き
けれども恐て耳は聞入る人も無し然れば女房こゝえて遂に死にけれ
は狗に被食にけり朝見ければ糸長き髪と赤き頭と紅の袴と切々にし
て凍の中に有ける其の後宣旨下て若し此盗人捕たらむ者には止事无
き賞を可給しとて噂り合たること无限し此のことは荒三位を云て藤
原の□□を云ふ人を負ける其れは其の荒三位の彼の狗に被食たる姫
君を假借しけるに不聞さりければとを世に人云ひ噂ける而る間檢非
違使左衛門の尉平の時道承りて尋ね求る間大和の國に下るに山城の
國に柞の杜と云ふ所の邊に男指會たり其の男檢非違使を見て突居た

る氣色の恠りければ其れを搦て奈良坂に將行て己は犯したる事有
めれと云て只問ければ男更に犯不仕すと諍けるを責て問ければ去々
年の十二月の晦比にそ人に被借て三條と西の洞院とに有し殿原に罷
入て物をは否不取て止こと无りし女房を質し取り奉て大官の辻に
棄て罷逃にし其の後承はりしは死て狗に被食給ひにけと云ふ
を聞て時道喜て其の男を將上て其の由を申し上たりしは時道大夫
の尉に可留しと世に云ひ噓かとも其の賞も无くて止にき何なるこ
をに可有けん必賞可有しと仰せ被下たりしとも遂に時道冠を得る
左衛門の大夫とてなむ有し世の人皆誘り申ししことなめり此れを思
ふに女也とも尙寢所などは拈る可有き也徒に臥たりしは此く質し
も被取たる也とそ人云けるとなむ語を傳へたるとや

阿彌陀聖人殺人宿其家被殺語第九

今昔□□の國□□の郡に□□寺と云ふ寺有り其の寺に阿彌陀の聖と
云ふこととしる行ふ法師有り鹿の角を付たる杖を尻には金を札に
したるを突て金鼓を叩て萬の所に阿彌陀佛を勧め行けるに山の中を
過さける程に男の物荷ひたる會ひたり法師相共に行けるに男旁に立
寄る突居て晝の物を取出して食ふに法師は過なむと爲るを男法師を
呼ければ寄ぬ此れ食とて飯と取せられは法師吉く食つ既に食畢つれ
は男本荷たる物を取て荷はむと爲る程に法師の思はく此は忽に人不
來まき所也此の男を打殺して持たる物と着たる衣共とを取らむに
誰かは可知きと思て今物持たむと爲る男の思ひ不掛ぬを法師俄に金
杖を以る頸を突つれば男此は何にし給ふと云て手を摺て迷へとも

法師本より強力也ける者にて聞ゆ不入すして打殺してけり然て持たる物と着たる衣共々を取るまゝ、飛ぶ如くにして逃て去ぬ遙に山を隔て遠く去て人郷の有けるに行出にければ今はよも人も不知しと思て人の家の有けるに寄る阿彌陀佛を勧め行く法師也日暮にけり今夜計宿し給るむやと云ければ家主の女有て男の物に罷行にたれども然らば今夜許は宿り給へと云て入れたれば下衆の小家なれば程も不隔すして法師を竈の前に居ゆたり然れば家女此の法師に向て見るに法師の着たる衣の袖口急と見ゆ其れに我の夫の着て行に布衣の袖に色草と縫合たりけるに似たり女思ひも不寄ねは然も心も不得て有るに家女尚袖口の極く恠く思ひければ然る氣无き様にて見るに只其れにて有り其の時に家女驚き怖恠むて隠し行て密に此ることなむ有

ることの有りむと云ければ隣の人其れは極て恠き事にこそ有ければ若し盗たるにや有らむ極く不審きこと也實に一定其の衣と見給は、聖を捕へて可聞きにこそ有なれと云ければ家女盗と不盗ぬは不知す先つ衣の袖口は止しく其れ也と云ければ隣人然らば法師の不逃ぬ前に疾く問て可聞きことなりと云て其の郷の若き男共強力なる四五人計に此事を聞せむ夜る其の家に呼て法師の物打食て思ひも不懸て打解て臥るを俄に寄て抑へて搦ければ法師此は何にと云ければ只縛りに縛て引出て足を夾て問ければも更に我犯すこと無しと云て不落さりければ人有りて其の法師の持たりつる袋を開て見よ家の主の物や有ると云ければ現に然ること也とて袋を開て見るに男の持て出よし物の限り有り然ればこそと云て其の時に法師の頂の上に坏に火を

入れて置いて聞ければ其の時になむ法師熱さに不堪して實には其の山中にて男の然々侍りしを殺して取たる物也抑も此は誰か問ひ給ふると云ければ此れは其の人の家也と云ければ法師然ては我れ天の責蒙まけりこそ答へける夜明て其の法師を前に立て郷の者共集て行て見ければ實に其の男と殺し置たるけり未た者も不暎失はて直くて有ければ妻子此を見て哭悲ひけり然て其の法師とは將返ても何にかはせむと云てやめて其の所に張付て射殺してけり此れを聞く人法師をなむ慍みける男の慈悲有て呼ひ寄せて飯分て食せなとしたりるを思ひも不知て法師の身よて邪見深くして物を盗み取らむとて殺したるを天の慍み給て外へも不行すしてやめて其の家に行て現に此く被殺る哀なる事也を聞く人云けるとなむ語り傳へたるとや

伯耆國府藏入盗人被殺語第十

今昔伯耆の守橋の經國と云ふ人有けり其人の伯耆の守よて有ける時世の中極く辛くて食物无き年有けり其れに國府の傍に院と云ふ藏共有り藏の物共は皆下し畢て物も无りける時に人の藏の邊を過けるに藏の内に叩く者有り何の叩くを聞ければ藏内よして云く盗人に侍り此の由疾く申し上給へ此の藏に餉の有しを見て少く取て命を助けむと思て藏の上に登て屋上を穿て餉に落掛らむとして手を放て落入たれば餉も无くて空ければ此の四五日返り可上き方も无くて既に餓死待なむとす出てこそ死侍らめと人此れを聞て奇異と思て守よ此の由を申ければ忽に在廳の官人を召て藏を開させて見れば年四十計なる男の糸綱らなる水旱装束直くしたる色も无きを引出た

り人々有て此れを見て云ふ甲斐無し速に被追放よと云ければも何て
の後の聞えも有りて云て藏の傍に幡物無に結て張懸てけり然るは痛う
云たる奴なれば可免放さよ口惜き態たりとなむ人云ひ誘ける此の
男の顔見知たる人更に无くてなむ止にけるとなむ語り傳へたるとや
幼兒盜瓜蒙父不孝語第十一

今昔□の□と云ふ者者けり夏比吉き瓜を得たりければ此れは難有き
物なれば夕さり方返來て人許へ遣らむを云て十菓計を厨子に入れて
納め置て出つとて云く努々此の瓜不可取すと云置て出ぬる後に七八
歳許なる男子の厨子を開て瓜一菓を取て食てけり夕さり方祖返て厨
子を聞て瓜を見るに一菓失にけり然れば又此れ瓜一菓失にけり此は
誰か取たるそと云へは家の者共我れも不取す我も不取すと諍合たれ

は正しく此れは此の家の人の爲態也外より人來て可取きに非すと云
て半无く責問ふ時に上に仕ひける女の云く晝見候つれと阿字丸こそ
御厨子を開て瓜一つを取出して食つれと祖此れを聞て此も彼も不云
て其の町に住ける長し人々を數呼集めけり家の内の上下の男女此
れを見て此は何の故に此は呼給ふに有らむと思ひ合たる程に郷の
人共被呼て皆來ぬ其の時に父其の瓜取たる兒を永く不孝して此の人
々の判を取る也けり然れば判をる人共此は何なることと問へは只
然思ふ様の侍る也と云て皆判を取つ家の内の者共は此を見て此許れ
瓜一菓よ依て子を不孝し可給きに非す糸物狂はしき事など云へど
も外れ人は何の可爲き母はた可云きにも非す極く恨み云ければも
父由无き事を不云と云て耳にも不聞入れし止にけり其後年月

を經る程に此の被不孝たる兒漸く勢長して元服なると世中に有けれども父不孝して後敢て相見る事无りけり而る間た其冠者可然き所に官仕へしける程に盗みしてけり然れば被捕て被問けるに然々の者の子也と云ければ檢非違使の別當より其の由と申すに別當慥に祖有る者也祖に付て沙汰と可致き也と有ければ魔の下部共此の冠者を前に立て祖の家に行て此の由を云て追捕せむと爲るに祖の云く此れ更に已の子に非す其の故は此れと不孝して敢て不相見すして既に數十年に成ぬと云へども魔の下部共不用すして恐喝惶ければ祖若し其達此の事を虚言と思ふ速し此れを可見しと云て彼の左地判取たる文を取在出て下部共に見す忽彼の判したる人共を呼て此の旨を云へは判したる人共正しく先年より然る事有きと云へは下部一人返て檢非違使を以

て此の由を申せし別當尤も祖不知まゝなりと有ければ下部共可云死方无くて其の冠者を具して返ぬ犯し隠れ无りければ獄に被禁しけり但し祖は更に事无くて止にけり然れば其の時になむ然まて不有ましと思ける者共も極く賢りける人々なと祖を讚め惶ける然れと祖は子を愛すること譬ひ无き事なれども賢き者は兼て子の心を知て此く不孝をして後の過を不蒙ぬ也けり此れを見聞くる人此の祖を極りける賢人々なとて讚けるをなむ語り傳へたとや

筑後前司源忠理家人盗人語第十二

今昔大和の守藤原の親任と云ふ人有き其の人の舅に筑後の前司源の忠理と云ふ人有けり心賢く萬の事知て極き物の上手よて有ける其の人方を違ふとて我が家近りける小家に行て竊に寝たりけるに大

路面の檜垣に副へて寤所をしたりければ其に寝たりけるに雨痛く降
て少し止たりけるに夜中にや成ぬらむと思ふ程に人の足音して我
寢たる傍の檜垣に立副ぬと聞けるに何なる事にや有らむ我れを可殺
き敵も不思議は此の家主を此彼せむる者にや有らむと思ふに怖く
て不被寢すして聞くに憑もしく有りなど云はむに音合すへき從者无
かりければ目を醒して耳を立て聞ければ大路中より人の足音して
過けるを此の本より檜垣の邊に立ける者「吹せーければ大路中より
行く者立留りて忍音に何主の坐するりと云ふ然也と答れば寄來ぬな
り然れば筑後の前司今を踏聞て入らむとするど恐ち屈りて寝たりけ
るに忽ちに入らむする氣色には非て忍て物を云ふを檜垣に付て耳を
立て聞けば人の許に入て物を取らむする由を云ひ語ふ也けり何こよ

入らむする盗人のや有らむと聞けば筑後の前司など云へは既に我
家に入らむする盗人にて有は其れは我の許に心安く仕ふ侍の仲する
事ぞと吉く聞つ云畢て然らば明後日何主を具して必ず坐し會へたと
契て歩ひ別れて去ぬあり賢く此に臥して此る事を聞つると思けるに
辛くして明ぬれば曉に家に返ぬ近來の人ならば明るや遅さと宿直を
も數儲け彼の仲するぞと云つ侍をも擲め置て入來らむとせむ盗人
をも尋て別當にも檢非違使にも可觸きに其比まては人の心ろも古代
也けるに合せて其の筑後の前司の心ろ直しき者よて口しけるにや此
の仲れる侍を然る氣无き様よて白地に外に遣て其れ無かりける間
に竊に家の内の物を吉きも悪きも一ツも不殘さば外に運てけり妻娘
などを兼てより異口に付て外に渡し置きけり然て其の契ける日の

暗々に成る程にそ此の仲する侍ひ來たりければ氣色も更に不見せず
不知せずして我等も有る様も持成して夜打更る程に忍て出る近き人
の家に入臥にけり其間に盗人共來て先づ門を叩きけるに此の仲する
侍門を開て入たりければ廿人許の盗人立にけり心に任て家の内を掠
けれども露許の物も无りければ盗人求め侘て出て行くとして此の仲
する侍を捕へて我等を謀て物も无き所に入れたりけると云て集て吉
く蹴つ踏つ撻して畢には縛て車宿の柱にとほろけにては可解免き様
も无く結ひ付て出て去にけり曉も筑後の前司返て本より有る様に持
成して此の仲する侍を求めども无し而る間に車宿の方に吟ふ者有
り何ぞと思て見すれば此の侍を車宿の柱に結付たり筑後の前司此れ
は仲し損て盗人に被縛付たるなめりと見るに可咲をければ此は

何にして此る目は見たるぞと問ければ侍今夜盗人の暎て此く縛り付
て罷去り候ぬる也と答へければ筑後の前司此く物も无き所と知々る
其の主達の坐することを可咲ければとて止にけり其の後物も无き所と知
て盗人も不入てそ有ける然れば近來の人の心には替たりし其の仲
とける侍は其のことども无くて其の所とは出て去にけり其の後夕侍
二人出來て被仕けり其れに其の家の物は外に運ひたりけるまゝに置
たる所も憑もしき所にて有ければ取寄する事も无くて要有る物をは
取寄せつゝを仕ひける而る間近き所に火の出來たりければ移りもそ
爲るとて物共を取出しけるよ本より外に置たる物なれば墓々しく可
取出き物も无りければ物も不入れぬ大きな唐櫃の一ツ有けるを
此の今出來れる侍二人して掻出しける程に火も不移て消にければ筑

後の前司物共取出たる所に忍て行て立りけるをは不知す此の二人の侍大唐櫃の鑰と捻抜て開て見るに露物も無りければ二人して云ひ合する様此は物无れ所にこそ有れ此の唐櫃をこそ心慥く思ひつれども此れも空にて物无りけり我れ等も被仕れて有とも可得き様も无き人にこそ有けれ何の頼り有らむ去來去なむと云て播烈て逃て去りけり然れど其の唐櫃をは女を挿入して置ける筑後の前司の云ける様は家の物外に運ひ置て吉き事有り惡き事有り盜人に物不被取ぬ此れ系吉き也二人の侍逃じつる此れ極て惡き事也と云ける賢き者なれど此る事はしたるそとは心へとも此れ系吉きこととも不思えす物を取寄せつゝ仕ひけむも極て惡かりけむ物を古は此る古代乃心持たる人を有けるとなむ語り傳へたるそや

民部大夫則助家來盜人告殺害人語第十三

今昔民部の大夫□の則助と云ふ者有けり終日行て夕さり方家に返り來たりけるに車宿の片角より男一人指出たりけり則助此れを見て此は何その者そと問ければ男忍て可申き事の候ふ也と云へと則助疾く云へと云ふに男極て密に申さむと思ふ也と云て人皆去つ近く寄て私語く様己は盜人候ふ此の乗せ給ひたる栗毛の御馬は極き一物かなと見給て今明日東の方に受領付して罷候ふを此れに罷乗て罷らはやと思給へて構へて盜まむと思ふ心の候を御門の開て候ひつるより入立て隠れて見候つれば内より御許立たる女出來て男の候つると語ひて長き鉾と取せてこそ屋の上に登せ候ひつれ定めて事せむと構ふ態よこそ候ふめれ見給つるにいたはしき事よて候へは破无る思えて然

はれ吉申て逃て罷なむと思給へてなむ云へは則助暫し隠て立てれ
と云て従者を呼て打私語て遣れと男我れを搦めむと留るにとや有ら
むと思へとも否不出て有る程に糸強氣なる者共二三人將來ぬ即ち火
を燃して屋の上へ登せ板敷の下を□ぬ暫計有て天井より侍際の者の
水早装束なるを捕へて引出して將來たり次に鉾を取て持來たり天井
に穴彫たりける然れば其れ男を問ふよ己は然々の人の従者也隠し可
申さにも非ず殿の寢入り給ひなむに天井より鉾を指下せ下にて取宛
てむ時に只指せと侍つればなむと云へは男をは捕へて檢非違使に付
けつ告たる盗人をは召出て其欲かりける栗毛の馬に鞍置てやめて家
の内にて乗せて追出してけり其の後其の盗人の有様を不知て止にけ
り此れは妻の密夫の有ければ謀たることよて有けるにや然れとも其

の妻をは尙其の後も久く棲けり極く心不得ぬこと也譬ひ契り深く志
不愚ぬ中也と云ふとも命に可代しや亦希有の乗馬の徳に命を存した
る者也盗人の心も哀也けりと聞く人云なるとなむ語り傳へたると
や

九條堀河住女殺夫哭語第十四

今昔延喜の御代天皇夜る清涼殿の夜の殿大臣御まゝけるに俄に藏人を
召ければ藏人一人参たりけるに仰せ給ひける様此の辰己の方に女の
音にて泣く者有り速に尋て参れと藏人仰せを奉はりて陣れ吉祥を召
て火を燈させて内裏の内を求むるに更に泣女無し夜深更よければ人
の氣色たに无ければ返て其由を奏するに天皇尙吉く尋ねよと仰せ給
へは其度は八省の内を清涼殿の辰己に當る所の官々の内を尋ね聞く

よ何にも音する者无ければ亦返り参り八省の内には不候ぬ由を奏するに然らに八省の外を尙尋ねよと仰有ければ藏人忽ち馬司の御馬を召て藏人其れに乗て吉祥に火を燃させて前に立て人數具して内裏の辰巳に當る京中を行て普く聞くに京中皆静まりて敢て人の音不爲す况や女の泣く音無し遂に九條堀河の邊に至ぬ一の小家乃有るに女の泣く音有る藏人若し此れを聞食けるよと奇異く思て藏人は其の小家の前に打立て吉祥を以て令走て京中皆静まりて女の泣音無し但し九條堀河なる小家になむ女乃泣く一人候ふと奏しけきは即ち吉祥返りて其女を慥に擲て可將参り其の女心の内に謀の心を以て泣く也と宣旨有と云へは藏人女を擲さするに女の云く己か家は穢氣也今夜盗人入り來て我の夫既に被殺にけり其の死たる夫家の内に未だ有と云

て音を擧て叫ふ事无限し然れども宣旨の有限りよ依て女を擲て内に將参ぬ其の由奏すれば即内裏の外よして檢非違使を召て女を給ひてけり此の女大きな偽有り而るに内の心を隠して外に泣き悲む事有るを速に法に任て勘問して其過を可行しと仰せ給ひければ檢非違使女を給はりて罷出ぬ夜明て此れを勘問するに暫は不承伏さりければと責めて問ければ女落て有のまゝに申けり早う此の女は密夫と心を合せて實の夫と殺させてける也けり然て此れを歎き悲むと人に聞せむ如爲に泣けるを女遂に否不隠さすして落ければ檢非違使此く聞て内へ参て此の由を奏しければ天皇聞食して然ればこそ其の女の泣つる音は内の心に違たりと聞しかは強に尋よとは被仰ふ也其の密夫慥よ尋ね擲めよと仰給ければ密夫をも擲て女と共に獄に被禁にけり然

れは心惡しと見む妻よは心を不免まゝき也とを此れを聞見る人皆云ける亦天皇とを尙人にも不御まきりけりと人貴ひ申けるとなむ語り傳へたるとや

檢非違使盜系被見顯語第十五

今昔夏比檢非違使數下邊に行て盜人追捕しけるに盜人をは捕へて繩付にければ今は可返きに□□と云檢非違使一人疑はしき事尙有を云て馬より下て其家に入ぬ暫許有て檢非違使出來たるを見れば前に然も不見のさりつるに袴の裾の初よりは複よ也ければ異檢非違使共皆目を付て恠しと思けるに初此の檢非違使の家へ未だ不入さりける時其の調度懸の男の此家より出來て主の檢非違使と私語つるを恠しと思へるに合せて此く檢非違使の袴の複らかなれば異檢非違使共

の云ひ合ひて云ふ様此れは極く心不得ぬこと也此の事不見顯すは我等か爲の恥也此てと否不止し構へて此檢非違使の裝束解せて見むと謀て此の捕へたる盜人を川原に將行て問はむと云合せて屏風裏と云ふ所に將行ぬ其にて盜人を問て後可返きに河原にて去來我等熱きに水浴むと一人の檢非違使の云ければ異檢非違使共は系吉き事也と云て皆馬より下て裝束を只解に解けるに此の袴複らうしたる檢非違使此れを見て此れ更に不有まじき事也系便无し輕々に何なる檢非違使の川原にて水は浴む馬飼ふ童部などの様は穴異様と云て我が裝束と解せむと謀るとは不知して只すゝろよすゝろひて腹立つ氣色を異檢非違使共見つゝ目と昨せつゝ己等の裝束をは只解に解つ此れ腹立て不解ぬをもあや慙立つ様にて只解し解せつ然て□看の長を呼て

此の殿原の装束共一具つゝ淨化所より取り置けと云ければ看の長寄て先つ此の袴類らみの檢非違使の装束と蓑草の上に置く程より袴の袂より白き糸の頭を紙して被裏たる二三十計ふたゝと落したり檢非違使共此れを見て彼れは何を々そと集て目を咋せて惶を問へ此の袴覆らましの檢非違使顔の色は朽し藍の様よ成て我れにも非ぬ氣色にて立てり異檢非違使共然こそあや慥立つれとも糸惜かまけれぬ裝束を取て忿き着て馬に乗て思々に馳散して逃て去にけれぬ檢非違使一人胸病たる者の顔つさよて我れにも非て裝束打して馬に乗て馬に被任て返にける然れぬ看の長一人なむ其糸を拾取て此の檢非違使の從者に取せける從者も我れにも非ぬ氣色にて糸を拾取ける放免共此れを見て已等よりち密に私語けるに我等も盜をして身を徒に成

して此の者と成たるは更に恥にも非さりけり此る事も有けりと云てそ忍て咲も合たりける此れを思ふに其檢非違使極て愚也ける者也極く欲く思ふとも然らば追捕せむ所にて糸を取て被見顯る極て奇異き事也然れぬ此の事異檢非違使共□に糸惜く思けり隠すとすれども自然ら世に聞えて此くなむ語り傳へたるとや

或所女房以盜爲業被見顯語第十六 女缺

攝津國來小屋寺盜鐘語第十七

今昔攝津國□の郡に小屋寺と云ふ寺有り其の寺に年八十許の有らむと見ゆる法師出來て其の寺の住持の法師に會て語る様已に西の國より罷上て京の方へ行ひと思給ふるに年老ひ身も羸て罷り可上さ様も不思議ぬを此の御寺の邊より暫し候ひむとなむ思給うる可然らむ

所より居る給てむやと云けれの住持忽に可被居き所こそ无けれ廻りも
无き御堂の廊などに被居ての風は吹き被疾れ給なかと云けれの此の
老法師の云く然らに鐘堂の下こそ候ひぬへのめれ廻りも全く侍る所
なれに其に侍らむと思ふの何にと云への住持の云く其れに吉き所也
然らに其に坐して被居たれに然て鐘をも被槌むの糸吉れこと也と
云への老法師喜ふ事无限然れに住持老法師を搦具して鐘堂の下に
將行て鐘槌の筵薦など有り其れにやめて居給たれとて居ゆつ然て鐘
槌の法師に會て此に浮たる老法師の出來て鐘堂の下に居たらむと云
つれに宿しつ鐘も槌らむと云つれに居たらむ程に槌けとなむ云つる
其の程に和院の息みて居たれと云への鐘槌の法師糸吉き事なると云
て去ぬ然て其の後二夜計此の老法師鐘を槌く其の次の日の己時計に

鐘槌の法師出來て此く口に鐘を槌く法師の何なる者ぞと見むと思て
鐘堂の下に御房に坐するのなと云て戸を叩開て這入見れに年八十計な
る老法師の極氣なるの長高の賤氣なるり布衣を腰に巻て差喬りて死
て臥せり鐘槌此を見て去返て御堂に住持の許より行て老法師の早う死
て臥せり此の何のせむと爲ると周たる氣色にて云への住持驚て鐘槌
を具して鐘堂に行て戸を細目より開て臨けに老法師實に死て臥せり然
れに戸を引立て住持の僧寺僧共此の由を告れに寺の僧共由无き老
法師を宿して寺を出しつる大徳のなと云て腹立合たる事无限然れと
も今の甲斐无郷の者共を催し取て奔させよと云への郷の者共を催
さるるに御社の祭近く成たるに何て可穢きと云て死人に手懸むと
云ふ者一人无し然りとて可有死事のいと云て嗚る日も午未計に成ぬ

而る間年卅計なる男二人推鈍色の水旱に裾濃の袴着たるの袴の香取
て高く夾みて前に大きな刀現差して綾蘭笠頭頭に懸て下衆なれども
月々しく輕ひやかなる出来ぬ僧房に僧共の居たる所に行て僧共に云
ふ様若し此の御寺の邊に年老たる法師や罷り行くと問への僧共一日
より鐘堂の下にこそ年八十計なる老僧の長高き有りつれ其れも今朝
見れぬ死て臥せるところを聞けと云への此の男共極く候ひける事かな
と云ふ儘は只泣に泣ぬ僧共此の何なる人なれぬ此く泣ての尋ぬるそ
と問への男共其の老法師の己等の父に侍り其れも老僻みて墓无り事
も思ふとに違ひぬれぬ此もぬれぬ逃て此く失ぬる事を仕る也播磨乃
國の明石の郡になむ住候ふ其れも一日失せて候への手を分て此日来
求め候ひつる也己等の不合の身にも不候へす四十餘町は名に負ひ侍

り此の隣の郡まで知たる下人の數侍り然るにても罷て見て其れも
候は、夕さり葬候はむと云て鐘堂の下に入ぬ住持も副て行て外に立
て見れば此の男共這入て老法師の顔を見るまゝに我々父は此に坐
りけるはと云て只臥し丸ひて音を擧て泣川ふ住持も此を見りに哀れ
に思えて被泣ぬ男共老僻み給て此も爲れば隱をり行き給て遂に由无
き所まで死給ひぬる悲き死の刻不會なりぬる事と云ひ次けて泣く事
无限し然て暫計有て今は葬り進らむ事構へむと云て戸を引立て出
去ぬ住持此の男の泣つること共を寺の僧共に語て哀める事无限し僧
共も此れを聞て泣く者も有り而る間戌時計に成て人四五十人計來て
嗚りて此の法師を將出すに調度負たる者共も數有り僧房共は鐘堂よ
り遠く去たれば法師を將出すをも出て見る人無し皆恐て房の戸共を

差して籠て聞けし後の山本十餘町計去て松原の有る中に將行て終夜念佛を唱へ金を叩て明るまで葬て去ぬ寺の僧共其の後此の法師の死たる鐘堂の當をに惣て寄る者无し然れば穢の間卅日は鐘槌も寄て不槌す三十日は既し畢ぬれば鐘槌の法師鐘堂の下掃むと思て行て見れば大鐘失にけり此は何にしたることそとて寺の僧共に普く告廻せは僧共皆集り來て見に盜てければ何にしまは有らむする其の老法師葬りしは早う此の鐘を盜まむとて謀たりける也けりと思て葬りし所ならむと云て寺の僧共郷の者共多く具て彼の松原に行て見ければ大なる松の木を鐘に切懸て焼たりければ鐘の碎共所々散たり極く構たりける奴かなと云て嗚り合たれとも此れ誰したると可知きま非ねは云ふ甲斐无くて止にけり然て其より其の寺の鐘は無き也此

れを思ふに構へて盜まむ事は爲る者も有なむ何て然か虚死はして不動すして久くは有らむ亦何ては涙は心に任せて泛なむ實に見けるに由无き者も皆悲かりける事也極かりける奴原の構へかなとなむ見聞く人云ひ嗚ける然れば萬の事をは現と思ゆること也と云ふとも不見知さらむ者のせむ事をは尙吉く思ひ廻らして可疑き也となむ語り傳へたるをや

羅城門登上層見死人盜人語第十八

今昔攝津の國邊より盜せむの爲に京に上げる男の日の未だ明クレタさりければ羅城門の下に立隠れて立ちりけるに朱雀の方に人重く行ければ人の靜まるまると思て門の下に待立てけるに山城の方より人共の數來たる音のしければ其れに見えしと思て門の上層に和ら搔つき登た

りけるに見れば火鬚に燃たり盗人恠と思て連子より臨ければ若き女の死て臥たる有り其の枕上に火を燃して年極く老たる嫗の白髪白き其の死人の枕上に居て死人の髪をわなくり抜き取る也けり盗人此れと見るも心も不得ねと此れは若し鬼にや有らむと思て怖けれども若し死人にても有る恐して試むとて思て和ら戸を開て刀を抜て己はと云て走寄ければ嫗手迷ひをして手を摺て迷へは盗人此は何その嫗の此はし居たると問ければ嫗己より主にて御ま一つる人の失給へるを葬ふ人の无ければ此て置奉たる也其の御髪の長に余て長ければ其を抜取て髪にせむとて抜く也助け給へと云ければ盗人死人の着たる衣と嫗の着たる衣と抜取てある髪とと奪取て下走て逃て去にけを然て其の上の層には死人の骸を多かりける死たる人の葬など否不

爲をは此の門の上にて置ける此事は其の盗人の人に語けるを聞繼て此く語り傳へたるとや

袴垂於關山虚死殺人語第十九

今昔袴垂と云ふ盗人有けり盗を以て業として有ければ被捕て獄に被禁たりける大赦に被掃て出よける可立寄き所も元く可爲き方も不思さりければ關山に行て露身に懸る物も无く裸にて虚死をして路邊に臥せりければ路行れ違ふ者共此れを見て此れを何にして死たる者に有らむ疵もなきと見續ひ云喰ける程に吉き馬に乗たる兵の調度を負て數れ郎等眷屬を具て京の方より出来たりける此く人の多く立約て物を見るを見て馬を急と留めて從者を寄せて彼れ何を見るぞと見せければ從者走り寄て見て疵も无き死人の候ふ也と云

けれど主然の聞くまゝに引組て弓を取り直して馬を押去て死人の有る方に目を懸て過ければ此れと見る人手を叩て咲ひけり然許郎等眷屬を具したる兵の死人に會て心地涼すは極き武者りなど咲ひ嘲けりけり程に武者は過ぎ行よけり其後人皆行散なとして死人の邊に人も无りける程に亦武者の通る有けり此れは郎等眷屬も无一只調度を負て此の死人よ只打に打懸りて哀れなる者かな何にして死たるよか有らむ疵も无さをと云て弓を以て差引なと爲るを此の死人や叩て其の弓よ取り付て起走て馬より引落して祖の敵をは此くそ爲ると云ふまゝ武者の前に差たる刀を引抜て差し殺してけり然て其の水早袴を曳剝て打着て弓胡録を取て搔負て其馬に這乘て飛り如くに東様よ行けるに同様に被掃て裸なる者共三十人許云契たりけれ十廿の末々來り會

たりけるを共人として道に會と會ふ者の水早袴馬などを取り弓箭兵仗を多く奪取て其裸なる者共に着せ兵具を調へ馬に乗せて郎等二十三人具したる者にてを下げれば會ふ敵无き者にてを有ける此る者は少隙も有れば此る事を爲る也其れと不知て近く打寄て手便に有らむには當に不取付ぬ様は有なむや初の心地立て過る馬乗を誰にか有らむ賢かりし者かなと思て問ひ尋ねければ村岡の五郎平の貞道と云ける者也けり其の人と聞てければ人理也けりとなむ云ける然許郎等眷屬有けれども此れを知て不緩にして通けむ賢き事也其れに従者も无き者の近く打寄て被殺る墓无き事也とを聞く人讚めも誇りも云ひ繚けるとなむ語り傳へたるとや

明法博士善澄被殺強盜語第二十

今昔明法博士よて助教清原の善澄と云ふ者有けり道の才は並无くして古の博士にも不劣ぬ者にてそ有ける年七十よ余て世の中に被用てなむ有ける家極く貧りければ萬つ不叶てそ過ける而る間居たる家は強盗入りけり賢く構へて善澄逃て板敷の下に這入にければ盗人も否不見付す成ぬ盗人入り立て心よ任せて物を取りて物を破り打ひめりて踏み壞て惶りて出にけり其の時に善澄板敷の下より念き出て盗人の出ぬる後に門に走り出て、音を舉て耶已等一や顔共皆見つ夜明けむまゝに檢非違使別當よ申して片端より捕へさせてむとすを極く妬く思わゆるまゝに叫て門を叩て云懸ければ盗人此を聞て此れ聞け已等去來返て此れ打殺してむと云てのらくと走り返ければ善澄手を迷して家に逃て板敷の下に念き入らむとるに迷て入る程に額

を延に突て急とも否入り不取さむければ盗人走り來て取て引出て太刀を以て頭を散々に打破て殺してけり然て盗人は逃にければ云ふ甲斐无くて止にけり善澄才は微妙りければ露和魂无りける者よて此る心幼き事と云て死ぬる也と聞れど聞く人々に云被誘けるとなむ語り傳へたる也

紀伊國清澄值盗人語第二十一

今昔紀伊國の伊都の郡に坂上の清澄と云ふ者有けり兵の道に極て緩ひ无りけり前司平の惟時の朝臣の郎等也京に要事有て上たりけるに身に敵有ければ不緩すて我れも調度負ひ郎等共にも調度負せなとして人に手可被懸くも无くて夜深更る程に物へ行けるに下邊に花やのに前追せて君達の馬よ乗り次きたるに値ひぬ前を追ひ喰は晴

澄馬より下て居たるを弓□して擡臥て候へよカと云けれど手迷
をして弓共皆□しつ顔を上付けて皆居たるに此の君達過さ給ふ
と思ふ程に晴澄より始めて郎等從者に至るまで頂の許皆人來て登て
押臥す此は何りに爲る事に有らむと思て顔を仰て見上たれば君達
と見つるに馬に乗たる者五六騎甲冑を着調度を負て極く怖し氣なる
者共箭を番て己は動ぬは射殺してむと云ふ早う君達に非て強盜の
謀つる也けり此く見るに實に妬く悔しき事无限し少く動ぬは被射殺
ぬべけれぬ只此奴原の爲るに任せて被打臥被引起心に任せて一人殘
さず皆着物を剝弓胡録も馬鞍も太刀刀も履物に到るまで悉く取て去
ぬ然れぬ晴澄不緩すして有まぬは何なる盜人有とも殺して討て
ぬ此は被擡め手限り戰て擡る様も有なむ其れに前を追ひ墮れぬ畏ま

りて屈まり居あるを此くせむを何よ可爲さ此は我の兵の道に不運
なるの致す所也と云て其れよ其後は武者も不立すして脇乗れ者に成
てなむ有ける然れぬ前追ふ人に値ふとも吉く可用意さことなりとな
む語り傳へたとや

詣鳥部寺女値盜人語第二十二

今昔物語破無く好ける人妻有ける其人の妻とは故よ不云年卅許の
たち有様も美のりけり其れぬ鳥部寺の賓頭盧こそ極く驗は御すなれ
とて共に女の童一人計と具して十月の廿日比の午時計に微妙く装を
き立て參けるに既に參り着て居たる程に少く送れて綱らぬなる雜色
男一人亦詣てたり此れ雜色男寺の内にて此の共よ有る女の童を引手
觸る女の童愕て泣く隣も无き野中なれば主此れを見るよ怖しき事无

限し男女の童を捕へて然らば突殺してむと云て刀を抜て押宛たり女の童音も不爲て衣を只脱に脱て弃てつ男其れを取て亦主を引手觸る主實に奇異く怖しく思ゆれども更なる術なし男主を佛の御後の方に引將行て二人臥す主可辭得き様无ければ男の云ふ事より隨ひぬ其の後男起て主の衣を引剥き糸惜ければ袴は許すと云て主從二人の首物を提て東の山に走り入にけり然れば主も女の童も泣居たれども更に甲斐無し此て可有き事に非ねは女の童清水の師の僧の許より行て然々鳥部寺に詣給へりつる程に引剥に値て裸にてなむ其の寺に御すると云て僧の鈍色の衣一つを借て女の童は僧の細の衣を借着て法師一人を副へたりければ其れを具して鳥部寺より返り行て主に其の衣着せてなむ京へ返ける程に川原に迎の車など來會たりければ其れに乗てなむ家

には返りたりける然れは心幼き女の行きは可止き也此く怖しきこと有り其の男主と親く成なは衣をは不取て去ねし奇異ありける其男の本は侍にて有ける盗して獄より居て後放免に成にける者也けり此の事隠すとすれども世に廣く聞えにけるにや此くなむ語り傳へたるこや

具妻行丹波國男於大江山被縛語第二十三

今昔京に有ける男の妻は丹波の國の者にて有ければ男其の妻と具して丹波の國へ行けるに妻をは馬に乗せて夫を竹箠簿箭十計差たるを擡負て弓打持て後に立て行ける程より大江山の邊に若き男の太刀計を帶たるの糸強氣なる行烈ぬ然れば相具して行くより互に物語なこして主は何へそなど語ひ行く程に此の今行烈たる太刀帶たる男の云く己

か此の帶たる太刀は陸奥の國より傳へ得たる高名の太刀也此れ見給へとて抜て見すれば實は微妙き太刀にて有り本の男此れを見て欲き事无限し今の男其の氣色を見て此の太刀要し御せは其の持給へる弓は被替よと云ければ此の弓持たる男持たる弓は然まての物にも非す彼の太刀の實に吉き太刀にて有ければ太刀の欲りけるは合せて極たる所得してむすと思て左右なく差替へてけり然て行く程に此の今の男の云く己か弓の限り持たるに人目も可咲し山の間其の箭二筋被借よ其れ御爲も此く御供に行けは同事には非すやと本の男此れを聞くに現にと思ふに合せて吉き太刀を弊き弓に替つるの喜さよ云まゝに箭二筋を抜て取せつ然れは弓持て箭二筋を手箭に持て後りに立て行く本の男は竹蠶簿の限を掻負て太刀引帶てを行ける而も間晝の養

せむとて藪の中に入るを今の男人近には見苦し今少し入てこそと云ければ深く入にけり然て女を馬より抱き下りなと爲る程に此の弓持の男俄に弓に箭番て本の男に差宛て強く引て己動かは射殺してむと云へは本の男更し此は不思議さりつる程に此くすれは物も不思議て只向ひ居たり其の時に山の奥へ罷入れ入れと恐せは命の惜さまゝに妻をも具して七八町計山の奥へ入ぬ然て太刀刀投よと制命すれば皆投て居れるを寄て取て打伏せて馬の指繩を以て木は強く縛り付けつ然て女の許に寄來て見るは年二十余許の女の下衆なれとも愛敬付て糸清氣也男此れを見るは心移にけれは更に他のことと思えて女の衣を解けは女可辭得き様无けれは云ふに隨て衣を解つ然れば男も着物と脱て女と掻臥て二人臥す女云ふ甲斐无く男の云ふに隨て本の男被

縛付て見けむに何計思けむ其の後男起上て本の如く物打着て竹蓋簿
 搔負て太刀を取て引帯て弓打持て其馬に這乗て女に云く糸惜とは思
 へとも可爲き様无き事なれば去ぬる也亦其に男をは免して不殺なり
 ぬるを馬をは疾く逃なむ爲に乘る行ぬるそこ云て馳散して行よけ
 れは行にけむ方を不知さりけり其の後女寄て男をは解免してければ
 男我れにも非ぬ顔つきして有ければ女汝の心云ふ甲斐无し今日より
 後も此の心にては更に墓々しき事不有しと云ければ夫更し云ふこと
 なくして其よりなむ具して丹波に行よける今の男の心糸恥の男女
 の着物を不奪取さりける本の男の心糸墓なし山中よて一目も不知男
 に弓箭を取せけむ事實に愚也其男遂に不聞えて止にけりとなむ語り
 傳へたることや

近江國主女將行美濃國賣男語第二十四

今昔近江國□□郡に住む者有けり未九年も不老ぬ程に失にければ其
 妻も未九年卅の程にるそ有ける子一人も不産さりけり京の人にてそ
 有ける其の夫の失たるを強に戀悲みければ甲斐もなくて京に上な
 むと思ひければ京にも可打憑人も不思議ささりければ思ひ縲て有
 ける程に年來付仕ひける男の萬し付て後安く翔ければ夫失て後は此
 れを打憑て何事も云合せて過けるに此の男の云く此徒然よて御む
 よりは此より近き山寺のふ候に御まゝして暫く御湯なども浴させ給ひ
 御行なとも心靜かに爲させ給へしと勧めければ女實に然も有る
 事也と思て然様に近き所からは行なむと云ければ男近き所に候ふ何
 てり愚あらむことは申候はむと答ふれば女京にも上なむと思へとも

京にも祖共もなく類親も无れは然様ならむ所に行て尼にも成なむと思ふそと云ければ男然て御まさむ間の事は已こそは縁奉らめと云へは女只出立に出立つ女をは馬に乗せて男は後に立て行けるに近き所を云ひつれとも遙に遠く將行ければ女此は何かに此くは遠きそと云ければ只御ませよも愚なる事は不仕らうと云て三日將行にけり然て人の家の有る門に女をは馬より下しる男は家の内に入ぬ女此は何りに爲ることやらむを心も不得ねとも待立てる程に男返り出て女を内へ將入ぬ板敷の有るに疊敷たる所に居たれば更に心も不得て女見居たれば此の男に家より絹や布などを取らば此は何事よく取するに有らむと思ふ程に男此の物を取るまゝに逃る様にして去ぬ其の後聞けは早う此男の謀たる様は此は主の女を美濃の國に將行て賣

つる也けり然て目の前に直を取る行也けり女此く聞て奇異と思て此の何かに我をは然々云てこそ山寺へとて將來たれ何かに此へと泣々く云へとも耳も不聞入すして男は直を取て馬に這乗て馳て去ぬ然れは女泣居たる程に其家の主女と置得たぞと思て女事の有様を問ければ女然々也と本よりの有様を語り涙を流して泣けれとも家の主も耳にも不聞入て有けるよ女只獨よて可云合さ人も无く可迷さ様も无かりければ泣悲むて云ける様我れと買取り給て更に其益不有極く我れと殺し給ふとも我り世に可有くはこそと云て泣臥にけり其の後物など持來て食せけれとも露起上ることもなかりけり云々むや努々物食ふ事は無かりければ家主も思ひ縊て口有けるに亦從者共然りとも暫こそ歎き臥たため遂には起上て物も食てむ只御覽せよなど口

々に云けれども日來を経て更に不起上さりければ希有也ける奴に被
□てなと思ひ云ける程に此の女遂に來たむ日より七日と云ふと思
ひ死に死けり然れば家主云ふ甲斐无くて止にけり此れと思ふに尙極
く事吉く云ふとも下衆の云はむ事には不付まじき也此の事は其の家
主の京に上て語けるを聞傳へて糸奇異く哀れ也ける事など思て此
く語り傳へたるとや

丹波守平貞盛取見干語第二十五

今昔平の貞盛乃朝臣と云ふ兵有けり丹波の守にて有ける時其の國に
有けるに身よ惡き瘡の出たりけれハ□□の□□と云止ことなき醫師
を迎へ下して見せければ醫師此れを極しく可慎き瘡也然れば兒干と
云ふ藥を求めて可治き也其れは人に不知せぬ藥也日來經は其れも難

聞かりなむ疾く可求給き也と云て外なる所に出ぬ然れば守我の子乃
左衛門の尉維衡と云ふを呼て我が瘡をは疵と此の醫師は見てけり極
しき態かな増して此の藥を求めは更し世に隠れ不有し然れば其妻こ
そ懷妊したなれ其れ我れに得させよと云ふを聞くに維衡目も暗て更
に物不思然りとして可惜き様无ければ早う疾く召せと答ふれば貞盛
糸喜し然らば其は暫し外し御して葬りの儲けとせよと云ひ固めつ然
て□□此の醫師の許に行て此る事なむ有ると泣々く語りけれハ醫師
も此を聞て泣ぬ然て云ふ様此事を聞くに實に奇異し已構へむと云て
館に行て何を藥は有やと守に問へは守其れハ糸難くて无き也然れば
左衛門の尉の妻の懷妊したるをそ乞得たると答ふれば醫師其れをは
何にせむ我の胤は藥に不成す疾く求替給へと云へは守歎て然は何の

可爲き尋ねよと云ふに人有て御炊の女こそ懐妊して六月に成ぬれと云ければ然らば其れを疾く取せよと云て開て見ければ女子よて有けれも弁るけり然れば外に亦求て守生さよけり然て醫師に吉き馬裝束米など員不知取せて返し上すとて子の左衛門の尉を呼て密に云く我が瘡は疵にて有ければ兒干をこそ付てければ世に弘こりて聞るなむとす公も我れをい憑もいさ者に思し食て夷亂れたりとて陸奥の國へも遣さむとすなり其れに其の人をこそ被射にければ聞えむ極き事に非すや然れに此の醫師を構へて失なひてむと思ふを今日京へ上せむに行會て射殺せと云ければ左衛門の尉系安きことに候ふ罷上らむを山に罷會て強盜を造て射殺し候ひなむ然れに夕さを懸て出立させ可給き也と云へに守然なりとて左衛門の尉を其の構へ仕らむ

とて急き出ぬ然て忍て左衛門の尉醫師に會て密よ云く然々のことをなむ守宜ふ其れをい何の可爲きと云へに醫師奇異く思て只何にも其に量らひて助け可給き也と云へに左衛門の尉の云く上給ひに山まで送りて被付る判官代をい馬に乗せて其の歩にて山を越る給へ一日の事の世々にも難忘く喜く候へに此く告申す也と醫師手を摺て喜て然る氣无くて出立立れに酉の時計に出立ぬ左衛門の尉の教へつるまよ山にて醫師馬より下て從者の様に成て行くに盜人出來ぬ盜人馬に乗て行く判官代を主と思ふ様よて構へたる事なれに射殺しつ從者共の皆逃て散にければ醫師平かに京に上着にけり左衛門の尉の館に返て射殺しつる由を守に云ければ守喜て有ける間に醫師の存して京に有て判官代を射殺してければ守此に何にいたる事と問ければ左

衛門の尉醫師歩よて従者の様に罷けるを不知して判官代馬に乗
たるを主と思て錯て射殺しつる也と云けれの守現にと思て其の後
ハ強よも不云て止にけを然れに忽にこそ左衛門の尉醫師よ恩を酬た
りけれ貞盛の朝臣の婦の懐妊したる腹を開て兒干を取らむと思ひけ
るこそ奇異く罪ハチナキふハチナキさ心なれ此れの貞盛の一の郎等館の諸忠か娘の
語けるを聞繼て此く語り傳へたるとや

日向守□□殺書生語第二十六

今昔日向の守□□の□□と云ける者有けり國に有て任畢にけれの新
司を待ける程國の可渡き文書共構へ書せける間に書生中に極く弁へ
賢くて手喜く書ける者一人を呼籠て舊き事を直しなとして書ける
に此の書生の思ける様此れ構へたる事共を書せての新司よ語りや

爲むすらむと守は疑はしゆるらむハ氣一からぬ心はへ有ぬれは定
めて惡き事もこそ有れと思えければ何て逃なむと思ふ心付よけれ
とも強なる者を四五人付て夜る晝護せければ白地に可立出様もな
りけり此く書居たる間廿日計にも成にければ文共皆書き拈てけり其
の時に守の云く一人して多の文を此く書つる事糸喜き事也京よ上ぬ
とも我れと憑て不忘て有れなんと云て絹四疋をなむ祿に取せたりけ
る然れとも書生祿得る空も無く心は騒きてそ有ける祿を得る立むと
爲る程に守親く仕ける郎等と呼て私語を久くしければ書生此れと見
るに胸□る靜心不思議す郎等私語畢て出て行くとして彼の書生の主御
せ忍ひたる所にて物申さむと呼放ちければ書生我れにも非て寄て聞
かむと爲るに忽に人二人を以て書生を引張せつ郎等は調度を負て箭

を差番て立ければ書生此は何ゆにせさせ給ふそと問ければ郎等極く
糸惜くの思ひ進れとも主の仰せなれば難辭申くてなむと云へと書生
然にこそは候ふなれ但し何こにて殺させ給はむすると問へ郎等
可笑らむ隠れに將行て忍ひやりにこそいと云へは書生仰せよ依て
此も彼もして給ひむに事の可申き様も無し但年來見奉りつ己申な
む事を聞給てむやと云ければ郎等何事そと問ふに書生年八十なる
母なむ家に置て年來養ひ候つる亦十才許なる小童一人候彼等か顔を
なむ今一度見むと思給うるを彼の家の前を將渡し給てむや然ら
彼等呼出て顔を見候ひむや云へ郎等糸安き事也然計のこと何
や無ゆらむと云て其方様は將行くに書生を馬に乗せて人二人
て馬の口を取て病人なむ將行く様に然る氣なくしてなむ將行ける郎

等の其の後に調度を賣て馬に乗てなむ行ける然て家の前を將渡る程
に書生人を入れて母に然々と云遣たりければ母人懸りて門の前に
出來たり實に見れば髪に燈心を載たる様にてホヤ氣に老たる嫗なり
けり子の童の十才許なるを妻なむ抱て出來たりける馬を留めて近く
呼寄せて母に云く露錯たる事もなければも前の世の宿世にて既に命
を召しつ痛く不歎給へて御ませ此の童に至ては自然ら人の子に成て
も有なむ嫗共何ゆに給ひむすらむと思ふなむ被殺る難堪さよりも
増り悲き今の早う入給ひね今一度御顔を見奉むとて參つる也と云け
るを此の郎等聞て泣けり馬の口に付たる者共も泣けり母に此れを
聞て迷ひける程に死入りけり而る間郎等此て可有き事に非ねん承
事あ不云をと云て引持行ぬ然て栗林の在ける中に入て射殺して頸取

て返にけり此れを思ふに日向の守何なる罪を得けむ詐り文を書する
そら尙罪深し况や書する者を咎無くして殺さむ可思遣し此れ重き盜
犯に不異すとを聞く人慄けるとなむ語り傳へたるとや

主殿頭源章家造罪語第廿七

今昔主殿頭源の章家と云人有けり兵の家への非ねとも心極て猛くて
晝夜朝暮に生命を殺すを以て役とせり凡そ此の章家り心のへ人ど
も不思議ぬことなむ多かりける肥後の守にて有ける時其の國に
有けるに極く愛しける男子の□□許在ける如日來重く煩けれ此れ
を歎き續ける程に小鷹狩しに出けるをたに郎等眷屬世に不知す疎き
事に思ひ云けるに其の子遂に失にけれ其母死入ある如くよて其の
死たる兒の傍を不離すして泣沈みて臥たりけり女房侍なども年來其

の兒を見馴て心はへの嚴々をけるを思ひ出つ難忍く泣き迷ひ合へ
りけるよ章家は兒死ぬと見置て其の日をたに不過さす狩に出て行に
けれ此れを見と見ける者は云ふ甲斐なきことになむ思ひける智有り
淨き僧なども此れを見て章家を責て吉き様に云成さむと思て云ける
は此れは只ならむ人の可爲き事にも非ず物の詫て坐するなめりなど
云ひける凡そ何にまれ露計の慈悲无くて只生たる者をは殺す事と
のみ知て哀ひの心は努々无かりけり正月の十八日に觀音の驗し給
ふ寺へ此の章家詣けるに道よ野の中に焼き残りたる草の少し有ける
を見て章家此の草の中には必兎有らむ如くと云て人を入れて追はせ
けれは兎の子六ッ走り出たりけるを下衆共集りて捕てけり章家然れ
はこそ此には兎有けれと云て其草に火を付けむとけりを共よ有け

る郎等共年の始の十八日に御物語せさせ給ふに此れ不候まじきこと也責ては還向にも非すなど云て止けれとも章家聞も不入を以て馬より下て自ら其の草に火を付たりければ兎多くもなくて只有つる子共祖と思し兎一ツを走り出たりけるとは打殺して奉てけり其の子共を侍の子共に取せて飼せむとて一つ取てけり然て還向して館に返て侍に上る所に平なる石の大きなるを置て其れを踏へて板敷の上へ上る石有けり守其れより立ち有つる兎の子共いと問ければ取たる者共各小舎人童など抱せて持來たりけるを守此に暫し遣せて見むするを云て乞取てけり然て左右の手より六ツの兎の子を一度取て取合せて母の幼き子とせよらゆ様は我の子我の子と云て□□□けれと郎等共は只爲る事なめりと思て庭に居並て見ける程に守年の始め

の走り者の生を不食さらむと思々しきこと也と云ふまゝに其の平なる石に六ツの兎の子を一度に打付てけり主の鹿鳥殺れを極く興有る事と思て常々云早しける郎等共も其の日此れを見ては糸惜さに否不堪にして一度に立てを逃て去るけるやゆて其の日守焼などして食てけり又其の國には飽田と云ふ所狩地にて有なり其の狩地は微妙ゆりけれとも本は臥木共高く大きなる小き石多くて馬否不走さゆければ十出来る鹿の六ツ七ツは必ず逃てを遁ける其れを此の守國の人を發して三千人計を以て其の石を皆拾ひ去せせてくほみたる所には其の石を埋て土と直しく置せ高さ所を馬の走り不當まじき程に引せなるとして其の後異山に鹿と多く人を集めて其山に追ひ掛けれり十出来る鹿の一ツ遁ること无ゆりけり然れり守極く喜びて員不知ぬ鹿を取

けり其の鹿の皮をは國共に出したてまつれとて預けて鹿の身の限を國府に運はせ館の南面の遙々を廣くて木も無き庭に隙も無く並へ置せたりければ其れにも置れ餘りて東西の庭にそ置たりける此の様は晝夜朝暮も緩む月日も無く罪をなむ遣ける其の飽田の狩の原は今に石一ツも無く直しくて有ければ此れを思ふも其の後異人の狩るにも本は十出來る鹿の六ツ七ツ遁れて逃し章家石拾はせて後に一ツ遁ることなけれは于今至らまて其の罪をは章家こそは負つらめ然れば章家死ぬる刻にも飽田の石拾の罪を何よせむすらむと歎てそ死にけるとそ其の家の者語けるとなむ語り傳へたるとや

住清水南邊乞食以女謀入人殺語第廿八

今昔誰とは不知す家高き君達の年若くして形も有様美麗なる有けり

近衛の中將なまよて有けるにや其人忍ひて清水に詣てたりけるに歩なる女の糸淨氣にてはなやりに着物など有る參會たり中將此れを見けるに下臈にも非ぬ者の忍て歩にて詣たるよと思て女の何心も無く仰たるを見れば年廿餘計也形も淨氣にて愛敬付たる事世に不似す微妙なりければ此は何なる者にや有らむ此れに物不云ては何てか有らむと思ふも萬つ不思議す心移り畢て女の御堂より出るを見て中將小舎人童を呼て彼の女の入らむ所慥に見て來れと云て遣つ然て中將家に返て後小舎人童返來て云く慥に見入れ候ひぬ京に不候さりけり清水の南に當て阿彌陀の峯の北なる所は候ふ家也糸も賑はし氣に住てなむ候ひつる共に候ひつる長しき女の己の後に立て罷つると見て恠く何の御共に參る様に見ゆると問ひ候つれば彼れ清水の

御堂にて見奉らせ給ひつる殿の慥に入せ給ひ所見て参り來と候つれ
いなむと申し候つれ此より後に若し参る事有らぬ已を尋よとこそ
申し候つれと語訖の中將喜て文を遣たせけれぬ女艶す書て返事有け
り此様は度々云遣ける程に女の返事にてみつ六字無らぬ山郷人なれぬ京
などへ出る事い否不有し然らぬ此方に渡せ給へ自ら物越にても申さ
むと云たりけれぬ中將女の見ま欲りける餘は喜ひ乍ら待二人計此
の小舎人童馬の舎人計を具して馬に乗て京を暗く成る程は出て忍て
行にけり彼に行着て童を以て此なむと云入させたりけれぬ女出て此
方に入せ給へと云けれぬ女の後に立て入るに見れぬ廻の築垣糸強く
して門高く立たり庭は深き塹をして橋を渡したり其れを渡て入るに
共の者共馬などをい塹此外なる屋に留めつ我れ獨り入て見れぬ屋共

數有り客人居と思しき所有り妻戸の有るより入て見れぬ糸吉く□ひ
さて屏風几帳など立淨氣なる疊など敷て母屋に簾掛たり中將此る山
郷なれども故有て住成したれぬ心慥く思て居たる程は夜も深更ぬれ
ぬ主の女出たり然れぬ几帳の内に入て臥ぬ氣近く成て後ハ近増して
勞たきこと无限而る間日來のことなど云次けて中將未までの深き契
など云臥たるに此の女極く物思たる氣ひにて忍て泣にや有らむと
思ゆ中將恠くて何と此の物歎たる氣色なるそと問けれぬ女只物哀れ
に思ゆ也と云けれぬ中將尙極て恠く思ひて今ハ此く馴ぬれぬ何事
也とも不隠れを然ても何なる事の有と此く不只ぬ氣色なるぬと強
に問けれぬ女の云く不申しぬと思ねとも申さむ付て心疎き事を
れぬと泣々云けれぬ中將只宣へ若し我り可死き事かどの有るぬと

云けれぬ女實に隠し可奉り事にも非ず己の京に有し然々と云し人の娘也其れ四父母失に一は獨り有しを此の家主は乞食の極く便りの付て此て年來居たりける如構へて我れ四京に有しを盗取て養ひ置て爲立て時々清水に參ぬれは參會たる男我れを見て此様に假借すれば此く御ましたる様に此に謀寄せて寝ぬる際に天井より鉾を差下したれは我か男の胸に取宛たる時に差殺して其着物を剝取り供人をは塹の外なる屋に置いて皆殺して其の着物を剝乗物と取る此様よ爲る事既よ二度に成たり此より後も然此のみこそは候はむすれ然れど此の度已れ殿に代りて鉾に當る死なむと思ふ也速に逃給ひ孫御共の人と皆死ぬらむ但一々見奉らむ事の不有ましきこそ悲けれと云て泣く事限无し中將此れを聞くに惣て物不思議す成ぬ然れ共思ひ念して云く

實に奇異き事かな我れに代らむと有るは世に難有き事なれども其を見棄てし獨り逃むこそ悲けれ然らば具して逃むと云へは女の云く絡返し然は思へども鉾空くは定めて急ぎ下て見むに二人乍ら无くは必ず被追て二人乍ら死あむとす只殿獨り命を存して我の爲に必し功德を作り給へ此より後も何て然のみは罪みと作らむと云へは中將其の我に代らむをは何ての功德を作て其の恩をば不報さらむ然も何にして迷むるそと云へは女塹の橋は渡給て後即ち引つらむ然れば此れより其方なる遣戸より出て塹の其方なる狭き岸を渡り築垣に狭き水門有り其より構て這出給へ既よ其の時に漸く成ぬ鉾を差下さは我れ自ら胸に取宛て被差て死なむと云ふ程に奥の方に人の音すれと怖しと云へは愚也や中將泣々く起て衣一ツ計引折て竊に其の教へ

つる遣戸を出て其の岸を渡り水門より構へて這出ぬ出たるは賢けれとも
も可行き方も不思議さりければ只向たる方に走ける程に後に人走
来る人の追て来る也けりと思ふも物も不思議に見返して見れば此の我
小舎入童也けを喜乍ら此は何れと問へば童の云く入せ給ひつるま
に壘の橋を引候つるを恠と思給へて構へて築垣と超て出候ぬるに残
者共を皆殺し候ぬと承つれば殿も何成せ給ぬらむと悲く思給て否
罷り不返て藪の中に隠居て此も彼も承らむとて候つるに人の走り候
へは若し然にやと思給へて走り参つる也と云への中將然々の事の有
けるを不知て奇異き事也と云て相具して京の方へ走ける程に五條と
川原の邊にて見返して見ければ其の有つる家の方に大なる火出来たり
けり早う鉾を差下して突殺しつと思けるに例にも不似す女の音も不

爲さりければ恠むて念下て見けるに男は無くて女を差殺したりけれ
ハ男逃なハ即ち人來て被擲なむとすと思ければ程なく屋共に火を付
て逃しける也けり中將の家よ返て童にも口固我れも其の後此の事を
人に不語して止にけり但し誰か爲にも不云して毎年大きに佛事と
儲て其の日功德を修けり定めて彼の女の爲こそハ有けめ此の事世に
聞ゑて人有て彼の家の跡にハ寺を起けり□□寺とて于今有り此れを
思ふに女の心實に難有し童の心糸賢かりけり然れハ美ならむ女な
と見て我り心のまゝに不知らむ所なとに行かむことハ此れを聽て可
止き也とそ人云けるとなむ語り傳へたる也

女被捕乞丐弃子逃語第廿九

今昔□□の國□□の郡に有る山を乞丐二人烈て通りけるに前に子を

負たる若れ女行けり女此れ乞丐共の後近く来るを見て傍に立寄て
過さむと一けるに乞丐共立留て只疾く行けと云て不前立せりければ
女尙前に行くを一人の乞丐走寄て女を捕へつ女人も天き山中なれば
可辭き様も无くて此は何よ給そと云ければ乞丐去來彼へ可云き事
の有る也と云て山中へ只引に引入れば今一人の乞丐は傍に見立てり
女の云く此く半无くなし給を云はむことは聞むと云へは乞丐吉々
然らば去來と云ふに女の云く山中也やも何て此る所にては人に物
をは云とむ柴などを立てし廻り隠せと云ければ乞丐現にもと思て木
の枝の滋を伐下しなど爲るに今一人の乞丐は女もを逃ると思て向ひ
立てて女よも不逃と但し我れ今朝より腹を術无病てなむ有るを彼に
罷て返て來むと思ふに暫く免してなやと云ければ乞丐更に不免さし

と云ければ女然は此の子を質に置たらむ此の子は我の身にも増て思
ふ者也世よ有る人上も下も子の悲さは皆知る事也然れば此の子を弃
てよも不逃しと只腹を術无く病て隙なきことの有れば彼にても留て
むと思て立留て過し申さむとは一つる也と云ければ乞丐其の子を抱
き取る然りともよも子を弃ては不逃しと思ければ然らば疾く行て返
來と云ければ女遙し行て其のこと構ふる様見せてやめて子を不
知す逃なむと思て走に走て逃ければ道に走り出にけり其の時に調度
負て馬に乗たる者四五人打羣て會たり女の喘たきて走るを見て彼れ
は何と走るそと問ければ女然々の事の侍て逃る也と云ければ武者共
いて何くよ有るそと云て女の教へけるまゝに馬を走せて山に打入て
見ければ有つる所し柴を立て其の子をは二ツ三ツに引破てなむ逃て

去にける然れど甲斐无くて止にけり女の子を悲しけれとも乞巧に
否不近付しと思て子を弃て逃たることとを此の武者共讚め感しける
下衆の中にも此く恥せ知る者の有也けりとなむ語り傳へたるや
上總守維時郎等打雙六被突殺語第三十

今昔上總の守平の維時の朝臣と云ふ者有けり此は□□の子なれば極
たる兵也然れば公私に付て露許も緩なる事无かりけり而る間其れ
郎等に名は不知す守大紀二と云ふ者有けり此の維時の許し數比郎等
有ける中に此の大紀二は並無き兵よてなむ有ける長高く見目鏑ら
よして力強く足早く魂太思量り賢くて並無き手聞にてそ有ける然れ
は維時此れを一の郎等として仕ける程し塵許も弊き事无かりけり而
る間維時の家にて此の大紀二同僚と雙六を打けるよ賤の様なる小侍

男の鬢ふくたみたる有て其の雙六打ッ番に居て見ける程に此の大紀
二の敵の吉き目を打て立て煩ける手と此の小男此こそ引りめと吉死
手の助言を和讀*したりけるを大紀二大きに嗔て白者の和讀*は此を爲ると云て
筒尻を以て小男の睚を痛く突たりければ小男被突て泣て立つと見る
程に俄に大紀二の顔を仰様に突ければ大紀二力強き者なれとも思ヒヤも
不懸さりければ仰様に倒るゝと小男我れは刀も不持さりければ大紀
二の前に差たる刀を押し伏るまよ引抜て大紀二か乳の上を小男恣
よ一寸許突てけり然て其上より刀を提乍ら踊て逃る行くを向て見る
敵も□て此も彼も否不爲さりければ逃て去にけり大紀二は吉き所を
被突にけれハ亦も不起上すして差反て死よけり其の時一家の者惶
合て求め騒げれども何れにハは有らむする跡を暗くして失にけれと

云ふ甲斐无て止まけり然れば此の小男力より始めて萬の事大紀二片にも不當まゝのりければ片も蔑よりける程に此く云ふ甲斐无く只一刀に後言をたに不爲て被突殺ぬるは主より始めて家の内の者共奇異のり難けれども此の小男の行方を更に不知て止にけり主の維持極く惜ひて歎けり大紀二極たる兵也けれども思ひ不掛ぬ糸弊き也然暈を痛く突ては男と成なむ者は不安すや思ふらむとは不疑して其を思ひ不寄て被突殺ぬれハ尙人と蔑る事は悪きこととを聞く人云誘けるとなむ語り傳へたるとや

鎮西人渡新羅值虎語第卅一

今昔鎮西□□の國□□の郡に住ける人商せむの爲めに船一ツに數の人乗て新羅に渡にけり商し畢て返けるに新羅の山の根に副て漕行け

る程に船に水なご汲入れむとて水の流れ出たる所にて船を留めて人を下して水を汲する程に船に乗たる者一人船に居て海を臨ける山影移たり其れに高さ岸の三四丈許上たる上に虎の縮り居て物を伺ふ様にて有ければ其の影の海に移りたりけるを傍の者共に此れを告て水汲に行たる者共など急に呼び乗せて手毎に櫂を取て急きて船を出ける時に其の虎岸より踊下りて船に飛入らむと爲るに船の疾く出つ虎の落來る程の遅ければ今一丈許不踊着すして虎海に落入ぬ船に乗たる者共此れを見て恐れ迷ふ船を漕て急き逃るまゝに集て此れ虎を目を懸たりけるに虎海に落入て暫許有て浮て陸に上たるを見れば汀に平なる石の有る上登ぬ何態爲るに有らむと見れば虎の左の前足膝より下切れて无一血出ぬ海に落て入りつるに鰐の昨切たるな

めりと見る程に其の切たる足を海に浸して平より居り而る間奥れ方より鱈此の虎の居る方を差して来る鱈来て虎に懸ると見る程に虎右の方の前足を以て鱈の頭より爪を打立て陸様より投上き一丈許濱に被投上て鱈仰様にて砂の上のためくと虎走り寄て鱈の頂の下を踊り懸て昨て二三度許打篩て鱈□□る際より虎肩に打懸て手を立たる様なる巖の高さ五六丈許有るを今三ツ足を以て下坂など走り下る様より登て行ければ船の内にも有る者共此れを見るより半は皆死ぬる心地す然れば此の虎の爲態を見るに船に飛入なま一匹は我等は一人残る者無く皆昨ひ被殺て家に返て妻子の顔も否不見て死なまし極き弓箭兵仗と持て千人の軍防くとも更し益不有し何況や狭き船の内にては太刀刀を抜て向會ふとも然許彼れ力力の強く足の早からむには何態を

可爲きと各云合て肝心もうせて船漕く空も無くてなむ鎮西には返り來りける各妻子に此の事と語て奇異き命を生て返たることをなむと喜ひける外の人も此れを聞て極くなむ恐ち怖れける此れを思ふより鱈も海の中にては猛く賢き者なれば虎の海に落入たりけるを足をは昨切てける也其れに由無く尙虎を昨はむとて陸近く來て命を失なふ也然れは萬のこと皆此れ如く也人此れを聞て餘りの事可止し只吉き程より可有き也と人語り傳へたる也

陸奥國狗山狗昨殺大蛇語第卅二

今昔陸奥の國□□の郡より住ける賤き者有けり家に數の狗を飼置きて常に其の狗共を具して深き山に入て猪鹿を狗共と勸めて昨殺せて取る事をなむ晝夜朝暮の業としける然れは狗共も役と猪鹿を昨習ひて

主山へ入れは各喜て後前きに立てそ行ける此く爲る事ぞ世の人狗
山と云なるへし而る間此の男例のことなれは狗共を具して山に入に
けり前にも食物なども具して二三日も山に有る事なりければ山に留
りて有ける夜大きな木の空の有ける内に居て傍に賤の弓胡録太刀
など置て前への火と焼きて有けるに狗共の廻に皆臥たりけり其れに
數の狗の中は殊勝れて賢かりける狗を年來飼付て有けるか夜打深更
る程に異狗共は皆臥たりに此の狗一は俄に起走て此の主の木の空に
寄臥して有る方に向て愕たしく吠ければ主は此は何を吠るよ有
らむと惟く思て喬平を見れとも可吠き物も無し狗尙吠ること不止し
て後には主に向て踊懸りつゝ吠ければ主驚て此の狗の可吠き物も不
見えぬに我れに向て此く踊懸るを吠ゆるは獸は主不知ぬ者なれば我

れを定めて此る人も无き山中にて昨てむと思ふなめり此奴切殺して
はやと思て太刀拔て恐れければとも狗敢て不止らすして踊懸りつゝ吠
ければ主此る狭き空にて此の奴昨付ての惡かりなむと思て木の空よ
そ外に踊出る時に此れ狗我が居たりつる空の上の方に踊上り物に昨
付ぬ其時主我れを昨むとて吠けるに非さりけりと思て此奴の
何に昨付たるにか有らむと見る程に空の上より器量き物落つ狗此れ
を不免さすして昨付たるを見れは大きき六七寸許有る蛇の長さ二丈
余許なる也けり蛇頭を狗に痛く被昨て否不堪すして落ぬる也けり主
此れを見るに極めて怖しき物から狗の心哀れに思えて太刀を以て蛇を
へ切殺してけり其の後を狗に離て去にける早う木末遙に高さ大きな
る木の空の中に大きな蛇の住けるを不知すして寄臥たりけるを吞

むと思て蛇の下ける四頭を見て此の狗の踊懸りつゝ吠ける也けり主
其れを不知すして上をは不見上さまけは只我れを咋むするなめり
と思て太刀を抜て狗を殺さむとしける也けり殺たらましは何計悔
しゆらましと思て不被寝さりける程に夜明て蛇の大きき長さを見け
るに半は死ぬる心地なむしける寝入たらむ程に此の蛇の下て巻付な
むよは何態をかせまし此狗は極うりける我々爲めの此の不世ぬ財に
こそ有けれと思て狗を具して家に返にけり此れを思ふに實に狗を殺
たらましは狗も死て主も其の後蛇は被吞まし然れは然様ならむこ
ととハ吉々思ひ辭めて何ならむことをも可爲さ也此る希有のことな
む有けるとなむ語り傳へたるとや

肥後國鷲野殺蛇語第卅三

今昔肥後の國□□の郡に住みける者有けり家の前より大ききある榎の木
の枝滋く差覆たる有ける下に鷲屋を造て其れに鷲を置てなむ飼け
る人數有て見ければ大きなる蛇の七八尺許なる其の榎乃木の下枝
より傳ひ下て鷲屋様に下けるを此の蛇のせむ様見むと云て集て見け
れは蛇下枝より傳ひ下て鷲屋の上より下て蟠居て頭を延へて鷲屋の内
を下様に臨けるに其の時に鷲は吉く寝入りければ蛇此れを見て鷲
屋の柱より漸く傳ひ下て鷲の寝入たるを蛇頭を以て鷲の腹の許に口
を宛つ然て口を開て鷲の嘴を本まで吞て尾を以て鷲の頭よを始めて
身を五ツ辛卷六辛卷許卷て尙殘たる尾を以て鷲の片足を三返り許卷
て縛る様よすれと毛は上て蛇は沈みて鷲の細く成許に強く巻き辛む
其時に鷲目を打見開て有るに嘴を被吞たれば目を塞て夕寝入ぬ此れ

を見る人此の驚は此の蛇に被蕩にたるにこそ有めれ此の驚は死むと
す去來打放てむなと云ふ者も有り又極き事有とも其の驚蛇に不被蕩
し只爲む様を見よと云ふ人も有ければ此も彼も不爲て見ける程に驚
又目を見開て顔を此彼篩るに嘴と本まで吞て下様に引下る様に爲れ
と其の時に驚不被卷ぬ方の足を持上て頸肩の程まで卷たる蛇を驚爪
を以て蹴て急と引て踏つれば嘴を吞たりつる蛇の頸を抜て離れぬ又
被卷たる片足を持上て翼懸て卷れたるを又蹴て初の如く引て又踏へ
つ然て前の度蹴たりつる所を持上てふつと昨切つ然れば蛇の頭の
方一尺許切れぬ又後に蹴たりつるを足を持上て又昨切つ然て又足卷
たりつる殘と昨切つ此く三切れに昨切て嘴を以て昨つし前に指置て
身篩打し翼疏し尾など打振て露事したりとも不思たらて有ければ此

れを見る者の共彼よも驚蛇よ不被蕩しと云つる者を然れとこそ極き
事有とも被蕩なむや此れは物の王なれは尚魂は餘の獸よは殊なる者
也なと云てそ讀め嗶ける此を思ふよ蛇の魂の極て啼き也本より蛇は
我より大きな物を吞むとは云乍ら驚を思ひ懸るは極て愚なる也然
れば人も此れを以て可知し我に増たらむ物と傾け犯さむと思はむ心
は努々可止し此く返て我の命を失ふ事有る也となむ語り傳へたるこ
や

民部卿忠文鷹知本主語第卅四

今昔民部卿藤原の忠文と云ふ人有けり此の人宇治に住ければ宇治の
民部卿となむ世の人云ける鷹をそ極て好けるに其の時に式部卿の重
明の親王と云ふ人御けり其の宮も又鷹を極て好み給けれは忠文の民

部卿の許に吉鷹數有と聞て其れを乞はむと思て忠文の宇治に居たりける家に御よけり忠文驚き騒て念き出會て此は何ことに依て思ひ不懸す渡り給へるを問ければ親王鷹數持給へる由を聞て其れ一ツ給はらむと思て參たる也と宣ければ忠文人などを以て仰せ可給きことを此く態と渡せ給へれば何て不奉ぬ様は侍らむと云て鷹を與へむと爲るに鷹數持たる中に第一にして持たりける鷹なむ世に並無く賢かりける鷹にて雉に合するに必ず五十丈り内を不過して取ける鷹なれば其れをば惜て次也ける鷹と取出て與へてけり其れも吉鷹鷹にてそ有けれども彼の第一の鷹には可當くも非ず然て親王鷹を得て喜て自ら居りて京に返給けるに道に雉の野に臥たりけるを見る親王此の得たる鷹を合せたりけるに其の鷹弊くて鳥を否不取さりければ親王

此く弊き鷹を得させたりけると腹立て忠文の家に返り行て此鷹をば返してければ忠文鷹を得て云く此れは吉き鷹を思てこそ奉りつれ然らば異鷹を奉らむと云て此く態と御たるにと思て此の第一の鷹を與へてけり親王亦其の鷹を居えて返けるに木幡の邊にも試むと思て野に狗を入れて雉を狩せけるに雉の立たりけるに彼の鷹を合せたりければ其鷹多鳥を不取すして飛て雲よ入て失にけり然れば其の度は親王何にも不宣すて京よ返給にけり此れを思ふに其の鷹忠文許にては並なく賢かりければ親王の手にて此く弊くて失せにけるは鷹も主を知て有る也けり然れど智り无き鳥獸なれども本の主を知れる事如此に况や心有らぬ人は故ら思ひ專に親からむ人の爲には可吉き也となむ語り傳へたることや

鎮西猿打殺鷺爲報恩與女語第卅五

今昔鎮西の□□國□□の郡に賤さ者有けり海邊近き所に住ければ其妻常に濱に出て磯せしけるに隣に有ける女と二人磯に出て貝つ物を拾けるに一人の女二歳許の子を背し負たりけるを平也ける石の上に下し置て夕幼き童の有けるを付て遊はせて女は貝を拾ひ行く程に山際近き濱なれば猿の海邊に居たりけると此の女共見て彼れ見よ彼れ魚伺ふにや有らむ猿の居るを去來行て見むと云て此の女二人烈て歩ひ寄るよ猿逃て行りむすらむと思ふに怖し氣には思たる物から難堪氣に思て否不去てわしめき居ければ女共何なるよと有るぞと思て立廻て見れば溝貝と云物の大きなるわ口を開て有けるを此の猿の取て食はむとて手を差入れたりけるに貝の覆てければ猿の手を昨へられ

て否不引出さて鹽は只滿に滿來るに貝は底様し堀入る今暫し有ては鹽滿て海に入へき程に此の女共此れを見て咲ひ喰るよ一人の女此れ猿を打殺さむとて大になる石を取て罰むと爲るを今一人の子負たりつる女ゆゑしき態爲る御許のな糸惜氣にと云て罰むと爲る石を奪へは罰たむとする女此る次てに此奴を打殺して家に持行て焼て食はむと思ふはと云ければとも此の女強に乞請て木を以て貝の口し差入れて□ければ少し排たれば猿の手をは引出てつ然て猿を助けむとて貝と可殺きに非すと云て異貝共をは拾ふ心なれとも其の貝をは知て引拔て沙に播埋てけを然て猿は手を引拔て走り去て此の女に向て事吉氣顔造て□□居ければ女已よ人の打殺さんとしつるを強に乞請て免すは□□の志にも非す獸也とも思ひ知れと云て猿此れを聞顔にて山様

に走り行ける。此の女の子居たる石の方様に走り懸りてゆれば、女恠と思ふ程に猿其の子を搔抱て山様へ逃て行ければ付て置たりつる小童此れを見て愕泣ける。を母聞付て見やりたるに猿我の子を抱て山様に走り入れは女彼の猿の我の子を取て行くを物思ひ不知さりける。奴など云へは打殺さむとつる女は然てこそよ和御許面に毛有る者は物の恩知る者は打殺たらまじは我れ所得したる者の和御許の子は不被取さらまじ然ても妬き奴りなと云て女二人乍ら走り懸りて追へは猿逃れとも□□に遠くは不逃去すして山へ入るに女共痛く走り追へは其れに隨て猿も走る女共靜に歩へは猿も靜に歩ひ去つ、一町許を隔て山深く入れは後よは女共不走走すして猿に向て心疎かりける猿かな已命の失ぬへかりつるを助けたるを其れを喜と思

はむことを難からめ我の悲と思ふ子を取て行くは何かに思ふを譬ひ其の子を食はむと思ふとも命を生つる代に我れに其子を得させよと云ふ程に猿山深く入て大きな木の有るに子を抱き乍ら遙りに登ぬ母は木の本に寄て異き態かなと思て見上て立てれば猿木の末よ大なる勝の有るに子を抱て居り一人の女は家に返て和御許の主に告むと云て走返て行ぬ母は木の本に留て見上て泣居たれば猿木の枝の大きなを引撓て持て子をは脇に挾て子を動かせは子音を高くして泣く泣止れと泣泣せ爲る程に驚其音を聞て取らむと思て疾く飛て來る也けり母此れを見て何様にて我の子は被取なむするよこそ有けれ猿不取すとも此の驚に必被取なむと思て泣居る程に猿此の引撓たる枝を今少し引撓て驚の飛て來るに合せて放たれば驚の頭に

當て逆様ニ打落しつ其の後猿尙其枝を引撓て子を泣せければ夕鷲飛來たるど前の如くして打落しつ其の時には母心得ける早う此の猿は子を取らむには非さりけり我れに恩を酬むとて鷲を打殺して我れに得させむと爲る也けりと思て彼の猿よ志の程は見つ然許に多只我の子を平のにて得せよと泣々云ける程は同様にして鷲五ツ打殺してけを其の後猿他の木に傳て木より下て子と木の本に和ら居る木に走り登て身打搔て居ければ母泣々喜て子を抱て乳飲せける程にそ子の父の男走り喘たきて來たりければ猿は木に傳ひて失にけり木の下に鷲五ツ被打落て有ければ妻夫の此のことを語りけるに夫も何かに奇異く思けむ然て夫其の鷲五ツの羽尾を切取て母と子を抱て家に返りにけり然て其の鷲の尾羽を賣つ仕ける恩報すと云乍ら女

の心何かに侘しけり此れを思ふに獸なれども恩を知ることは此なむ有ける何況や心有らむ人は必ず恩をは可知き也但し猿の術こそ糸賢けれと人云けるとなむ語り傳へたるとや

於鈴鹿山蜂螫殺盜人語第卅六

今昔京の水銀商する者有けり年來役と商ければ大に富て財多くとて家豊也けり伊勢の國に年來通ひ行ける馬百餘疋に諸の絹糸綿米など負せて常に下り上り行けるに只小兒小童部を以て馬を追せてなむ有ける此様にしける程に漸く年老にけり其れに此く行けるに盜人に紙一枚被取ること无りけり然れば彌よ富ひ増りて財失すること无し火に焼け水に溺る事无りけり就中に伊勢の國は極き父母の物をも奪取り親き疎れをも不云ぬ貴きも賤きも不簡す互に隙と

當て逆様よ打落しつ其の後猿尙其枝を引撓て子を泣せければ夕鷲飛
來たるや前の如くして打落しつ其の時には母心得ける早う此の猿は
子を取らむとには非さりけり我れに恩を酬むとて鷲を打殺して我れ
に得させむと爲る也けりと思て彼の猿よ志の程は見つ然許に多只我
の子を平のにて得させよと泣々云ける程よ同様よして鷲五ッ打殺
してけを其の後猿他の木に傳て木より下て子と木の本に和ら居る
木に走り登て身打搔て居ければ母泣々喜て子を抱て乳飲せける程
にそ子の父の男走り喘たきて來たりければ猿は木に傳ひて失にけり
木の下に鷲五ッ被打落て有ければ妻夫の此のことを語りけるに夫も
何かの奇異く思けむ然て夫其の鷲五ッの羽尾を切取て母と子を抱て
家に返りにけり然て其の鷲の尾羽を賣つ仕ける恩報すと云乍ら女

の心何かに侘しりけむ此れを思ふに黙なれとも恩と知ることば此
なむ有ける何況や心有らむ人は必ず恩をは可知き也但し猿の術こそ
糸賢けれと人云けるとなむ語り傳へたるとや

於鈴鹿山蜂螫殺盜人語第卅六

今昔京の水銀商する者有けり年來役と商ければ大さに富て財多く
て家豊也けり伊勢の國に年來通ひ行けるよ馬百餘疋に諸の絹糸綿
米など負せて常に下り上り行けるに只小兒小童部を以て馬を追せ
てなむ有ける此様にしける程に漸く年老にけり其れに此く行けるに
盜人に紙一枚被取ること无のりけり然れば彌よ富ひ増りて財失する
こと无し火に燒け水に溺る事无のりけり就中に伊勢の國は極き父
母の物をも奪取り親き疎れをも不云ぬ貴きも賤きも不簡す互に隙と

量て魂を暗まして弱き者の持たる物をは不憚す奪取て己り貯と爲る所也其れに此の水銀商か此く晝夜ニ行くを何なる事ニ物ヲをのみおむ不取せりける而る間何也ける盗人にハ有けむ八十余人心を同くして鈴香の山にて國々の行來の人の物を奪ひ公け私の財を取て皆其人を殺して年月を送ける程に公も國の司も此れを被追捕ス事も否无ハりける其の時に此の水銀商伊勢の國より馬百余疋に諸の財を負せて前々の様に小童部を以て追せて女共ヲを具して食物などせさせて上ける程に此の八十余人の盗人極ニ白者ハ此の物共皆奪取らむと思て彼の山の中にして前後に有て中に立挾めて恐シければ小童部は皆逃て去にけり物負せたる馬共皆追取つ女共をは皆着たる衣共を剝取て追奔てけり水銀商は淺黄の打衣に青黒の打袴ヲを着て練色の衣

の綿厚らりなる三ツ許を着て菅笠を着て草馬に乗て有けるハ辛くして逃て高き岳に打上にけり盗人此れを見ければハ可爲キ事无キ者なめりと思ひ下して皆谷に入にけり然て八十余人の者各思ハきに隨て諍ハひ分ち取てけり取て何にト云ふ者元ければ心靜に思けるに水銀商高き峰に打立て敢てことハも不思たらぬ氣色ニて虚空を打見上つハ音を高くして何ら々ら遅シ々ト云立てりけるに半時計有て大きき三寸計なる蜂の怖シ氣なる空より出來てふんニ云て傍なる高き木の枝に居ぬ水銀商此れを見て彌ヨ念シ入て遅シ々ト云ふ程に虚空に赤き雲二丈許ニて長さ遙ニて俄に見え道行く人も何なる雲ニ有らむと見けるに此の盗人共ハ取たる物共拈ける程に此の雲漸く下て其盗人の有る谷ニ入ぬ此乃木に居たりつる蜂も立て其方様に行ぬ早う

此の雲と見つるハ多の蜂の羣て来るハ見ゆる也けり然て若干の蜂盗人毎に皆付て皆螫殺してけり一人に一二百の蜂の付たらむたに何ならむ者ハ堪むとする其れに一人に二三石の蜂の付たらむには少々をこそ打殺しけれども皆被螫殺にけり其の後蜂皆飛去にければ雲も晴ぬと見えけを然て水銀商は其の谷に行て盗人ハ年來取貯たる物共多く弓胡録馬鞍着物などに至まで皆取て京に返にけり然れば彌よ富増てなむ有ける此の水銀商は家ハ酒を造り置て他のことにも不仕すして役と蜂に吞せてなむ此く祭ける然れば彼れか物をと盗人も不取さりけるを案内も不知さりける盗人ハ取て此く被螫殺る也けり然れば蜂その物の恩は知り心有らむ人は人の恩を蒙りなは必ず可酬さ也然大きならむ蜂の見えむに專に不可打殺す此く諸の蜂を具し將來

て必ず怨を報する也此れ何れの程のことにも有けむ此なむ語り傳へたるどや

蜂擬報蜘蛛怨語第卅七

今昔法成寺の阿彌陀堂の檐に蜘蛛の網を造たりけり其の□□長く引て東の池に有る蓮の葉に通たりけり此れを見る人遙に引たる蜘蛛の□□かなと云て有ける程ハ大きなる蜂一ツ飛來て其の網ハ邊を渡りける其の網に懸りけり其の時何こよりハ出來けむ蜘蛛□□に傳ひて急き出來る此の蜂と只卷に卷ければ蜂被卷て可逃ハ様も无くて有ける其御堂の預也ける法師此れを見て蜂の死なむるを哀むて木を以て搔落しければ蜂土に落たりけれども翼をつふめ被卷籠て否不飛さりければ法師木を以て蜂を抑へて□□を搔去たりける時

に蜂飛て去にけり其の後一兩日を経て大きなる蜂一ツ飛來て御堂の
擔にふめき行く其れに次きて何こより來るとも不見ゑて同程なる蜂
二三百計飛來ぬ其蜘蛛の網造たる邊に皆飛付て擔垂木の迫などを求
けり其の時に蜘蛛不見さりけり蜂暫く有て其の引たる糸を尋て東
の池に行て其の□□を引たる蓮の葉の上よ付てふめき喰けるに蜘蛛
其れよも不見えさりければ半時計有て蜂皆飛去て失よけり其時に御
堂の預の法師此を見て恠ひ思ふに此れは早う一日蜘蛛の網に懸りて
被卷たり一蜂の多の蜂を倡て來て敵罰むせて其の蜘蛛を求る也けり
然れば蜘蛛は其れを知て隠れにけるなめりと心得て蜂共飛去て後に
法師其の網の邊に行て擔を見り蜘蛛更に不見ゆさりければ池に行
其の引たる蓮の葉を見ければ其の蓮の葉をこそ針を以て差たる様に

隙も無く差たれば然て蜘蛛は其の蓮の葉の下に蓮の葉の裏よも
不付て□□に付て不被螫まゝ程に水際よ下てこそ有けれ蓮の葉裏
返て垂敷き異草共など池に滋たれば蜘蛛其の中に隠れて蜂は否不見
付さりけるにこそ此は預の法師此を見て返て語り傳へたる也けり此
れを思ふに智り有らむ人すら然は否思ひ不寄しか蜂の多の蜂を倡集
めて怨を報せむと爲るよ然も有なむ獸と皆互に敵を罰つ常のこと也
其れに蜘蛛の蜂我れを罰に來らむすらむと心得て然て許こそ命は助
らめと思得て破无くして此を隠れて命を存する事は難有し然れば蜂
には蜘蛛逃に増たを預の法師の正しく語り傳へたるとや
母牛突殺狼語第卅八

今昔奈良の西の京邊に住ける下衆乃農業の爲に家よ特牛を飼ける也

子を一ツ持たりけるを秋比田居に放たりけるに定まりて夕さは小
童部行て追入^レける^ル事^ヲ家主も小童部も皆忘れて不追入さり
けれと其の牛子^ヲを具して田居に食行ける程に夕暮方に大きな狼一
つ出来て此の牛の子と昨はひとて付て廻り行けるに母牛子を悲^シ故
に狼の廻るに付て子を不昨せしと思て狼に向て防さ廻ける程に狼片
岸の築垣の様なるか有ける所を後にして廻ける間に母牛狼に向様に
て俄にはたど寄て突ければ狼其の岸に仰様に腹を被突付ければ否
不動て有けるに母牛は放つる物ならば我は被昨殺なむと思けるに
力を發して後足を強く踏張て強く突^カへたりける程に狼は否不堪す
して死^シけり牛其れをも不知^シて狼は未^タ生^タるやと思ひけむ突
へ乍ら終夜秋の夜の永きになむ踏張て立てりければ子は傍に立てな

む泣ける此と牛主の隣也ける小童部其れも夕牛追入れむとて田居に
行たりける^ル狼の牛を廻行けるまては見ければとも幼き奴にて日の暮
にければ牛を追て家に返來たりければとも此も彼も不云て有けるに彼
の牛主の夜曉て夜牛を不追入さりける其の牛は食や失ぬらむと云け
る時^ニは隣の小童部御牛は夜前然々の處にてこそ狼の廻り行^クと
云ければ牛主聞驚て迷ひ騒て行て見ければ牛大きな狼を片岸^ニ突
付て不動て立てり子は傍に泣て臥せり牛主の來れるを見て其の時^ニ
なむ狼を放たりければ狼は死て皆^ク□□ちなむ有ける牛主此を見て奇
異と思けるに夜前狼の來て昨はひとしけるを此く突付たりける^ニ放
ては被殺なむと思て終夜不放さりける也けりと心得て牛となむ極く
賢かぞける奴^ノなと讀めて具して家に返にけり然れば獸なれとも魂

有り賢き奴つは此を有ける此れは正しく其の邊なる者の聞繼て此く語り傳へたるをや

蛇見女陰發欲出穴當刀死語第卅九

今昔若き女の有ける夏比近衛の大路と西様に行けるか小一條と云ふは宗形也其の北面を行ける程に小便の急也けるにや築垣より向て南向に突居て尿をしければ共より有ける女の童は大路に立て今や爲畢て立去と思ひ立けるに辰の時計の事にて有けるに漸く一時許不立さりければ女の童此は何にと思てやと云けれども物も不云て只同じ様よて居たりけるに漸く二時許にも成にける日も既に午時に成にけり女の童物云へとも何にも答へも不爲さりければ幼き奴にて只泣立たりけり其の時に馬に乗たる男の従者數具して其を過けるに女の童の

泣立りけるを見て彼れは何と泣そと従者を以て問せければ然々の事の候へはと云ければ男見るに實に女の中結て市女笠着たる築垣に向て蹲マタに居たり此は何より居たる人そと問ければ女の童今朝より居させ給へる也此て二時には成ぬと云て泣ければ男恠ウツりて馬より下て寄て女の顔を見れば顔よ色もなく死たる者の様に有ければ此は何かに病の付たるか例も此る事や有ると問ければ主は物も不云す女の童前に此る事無しと云へは男の見るに无下の下衆には非ねは糸惜くて引立けれども不動さりけり然る程に男急と向の築垣の方と不意す見やりたるに築垣の穴の有けるより大なる蛇の頭を少し引入て此の女を守て有ければ然は此の蛇の女の尿しける前を見て愛欲を發して蕩したれば不立也けりと心得て前より指たりける一とひの釵の様な

るを抜て其の蛇の有る穴の口は奥の方の刀の齒を以て強く立てけり
然て從者共を以て女を濟上て引立て其を去ける時、蛇俄に築垣の穴
より鉾を突く様に出ける程に二に割にけり、一尺計割にければ否不出
して死けり、早う女を守て蕩して有けるに俄に去けるを見て刀を立た
るをも不知て出けるよこそは然れば蛇の心は奇異く怖らさき者也、
諸の行來の人集て見けるも理也、男は馬に打乘て行にけり、從者刀をは
取てけり、女をば不審りて從者を付てを慥に送りける、然れば吉く病
ひしたる者の様、手を被捕捉てを漸く行は其の後の事は不知す、然れば
此れを聞かむ女を然様ならむ敷に向て然様のことを不爲まじ、此れは
見ける者共の語けるを聞繼て此く語り傳へたることや

蛇見僧晝寝閉吞受婦死語第四十

今昔若き僧の有ける如止こと无き僧の許に宮仕しける有けり、妻子な
を具したる僧也けり、其れ主の共に三井寺に行たりけるよ、夏比晝間
に眠たけり、ければ廣き房にて有ければ人離たる所に寄て長押を枕に
して寝にけり、吉く寢入にけるに驚かす人も无りければ、久く寢たり
けるに夢よ美き女の若き如傍に來ると臥して吉々と婚て婦を行
つと見て急と驚き覺たるに傍を見れば五尺許の蛇有り、愕て如さど起
て見れば蛇死て口を開て有り、奇異く恐らくて我の前を見れば婦を行
ひて温たり、然れば我れは寢たりつるに美き女と婚と見つるは此の蛇
と婚けると思ふに物も不思議、恐らくて蛇の開たる口を見れば婦
口に有て咄出したる此れを見るに早う我の吉く寢入よける間閉の發
たりけるを蛇の見て寄て吞ける如女と嫁とは思えける也けり、然て婦

を行ひつる時に她の否不堪て死よける也けりと心得るに奇異く恐らくて其を去て隠にて閉を吉々く洗て此の事人にや語らまーと思ければも由无きこと人に語て聞えなは她に嫁たりけず僧也ともを被云ると思ければ不語さりけるに尙此の事の奇異く思えければ遂に吉く親かまける僧よ語けるに聞く僧も極しく恐けり然れば人離れたらむ處よ獨り晝寢は不可爲を然れとも此僧其の後別の事无かりけり畜生は人の媼を受つれば否不堪て死ぬと云ふは實也けり僧も憶病よ暫は病付たる様にてそ有ける此の事は其の語り聞せける僧の語けるを聞たる者の此く語り傳へるとや

明治十五年八月四日出版御届

定價金三十錢

出版人

東京府平民
近藤圭造

深川區富岡門
前町七十番地

發兌出版所

東京深川公園内
近藤活版所

東京發兌

丸屋善七
吉川半七

取次人

芝區濱松町壹丁目十五番地
志賀二郎

